

日本スポーツ社会学会会報

Vol. 29

Sport Sociology

【目 次】

新会長挨拶	1	第10回学会大会特集	13
旧会長挨拶	2	総会報告	36
新理事長挨拶	3	第V期 第5回理事会報告	40
旧理事長挨拶	5	第11回学会大会開催校挨拶	41
新研究委員長挨拶	5	新刊紹介	42
旧研究委員長挨拶	6	新事務局長挨拶	45
新編集委員長挨拶	7	旧事務局長挨拶	46
旧編集委員長挨拶	8	会員動向	47
「スポーツ社会学研究」投稿の案内	9	編集後記 事務局住所	50
国際交流委員会から	11		

日本スポーツ社会学会

Japan Society of Sport Sociology

事務局 立命館大学 2001年7月

新会長挨拶

平野秀秋（法政大学）

『会報』の場を借りて皆さまにご挨拶申し上げます。数日前、新事務局長からご連絡があり、今年度になってすでに三名の新しい会員をお迎えしたことでした。はからずもお引き受けすることになった役目とは申せ、新しくご加入下さる方々のご期待を裏切らないようにしなければと、痛感します。幸い創立以来これまでに、井上前会長以下役員・会員皆さまのご尽力により、とりわけ火急に対処すべき業務が山積している状態はなくなりました。それだけにお、重心を落として詰めを怠らぬよういたしたいと願っています。この機会に、私見をすこしだけ述べさせていただきます。

これまでも、スポーツ社会学の対象は 1) いわゆる「スポーツ」（スポーツだとされているスポーツ）にとどまらず、2) まだまだ未開拓に近い領域として「スポーツ史」があります。さらにこれらに関連して、3) スペクテーター・スポーツやスポーツ・イベントの研究もあります。またこうした近代スポーツに止まらず、従来人類学や民俗学が扱ってきたような 4) 伝統的な儀礼を含む「身体活動」なども、着々と会員の注目を集めつつあります。さらに、第三回学会大会の頃から、多くの方々が課題として上げておいでるものに 5) 心身二元論への打開策としての「身体論」という問題領域があります。

こうしてみると、当学会がカバーしている領域の広く大きいことに、あらためて驚かされます。まさにスポーツは人間社会を如実に映す鏡という観を強くします。こうした領域の広さは当然大きな長所ですが、これを長所とするには会員がこれらのどれかだけに集中するのではなく、すべてにわたって関心を共有する必要が大きいと思います。さもなければ、制度化された「専門の枠」という昨今の学問を spoil している傾向に染まることになります。自分自身で恐縮ですが、社会学部に入学する新入学生は大きく二つの種類に分かれるようです。彼らは問われると「フェミニズムとか援交とか情報なんかやるところ」などと答える者が三割ほど、残りは「何でも対象に研究できるところ」と答えます。稚拙な表現ながら、社会学の可能性に興味をかられるものは多いようです。好奇心から学問がはじまる以上、重要なことでしょう。同時に、若い人々の好奇心を「学問枠」の中に閉じこめる傾向がいかに有害かと、強く意識いたします。その意味で、アカデミック・コミュニティとして会員の研究に関する意志疎通が十分に高い当学会が、学問の基本問題に直接貢献する必要性がありますます大きいと考えられます。

上に上げた 1)、2)、3) などの領域は、今後もさらに研究のメスが入れられることと期待します。制度論・制度史的側面、国家公共財政や経済的側面などにも、鋭い目が向けられることを期待いたします。また 4) は、民族音楽学の泰斗ケルト・ザックス（『世界舞踏史』1937）などが研究の必要と可能性を訴えて以来継続されている領域です。しかし社会学の中では、ともすれば意味論とか劇場論などあらぬ方向に気が紛れて、蓄積が必要

ずしも十分でない領域でしょう。さらに5)は、人工授精やGMなどを念頭に置けば、専門の枠などをはるかに越えて社会の核心に横たわる基本問題でありながら放置されている観さえあります。ウエーバー以後、社会(societas)は国家(civitas)に包摶されるものでなく、これと対立する概念だという、学の根本精神を忘れてしまった20世紀社会学の致命的誤りの帰結でしょう。当学会が、こうした根本問題への至近距離に位置していることを銘記いたしたいものと、感じています。

旧会長挨拶

井上 俊(京都大学)

1991年の3月、当時天理大学におられた糸野豊先生から、スポーツ社会学会の設立を企画しているので、池田勝先生、田原音和先生らとともに発起人の一人になってほしいというお話をいただきました。そして、3月末には上智大学で設立総会が開かれ、日本スポーツ社会学会が発足することになりました。筑波大学に事務局が置かれ、理事選挙が行なわれ、秋には第Ⅰ期理事会がスタートしました。その構成は、理事長=糸野豊、庶務=佐伯聰夫、会計=森川貞夫、研究=今村浩明・亀山佳明・小椋博、学会誌編集=江刺正吾・影山健・山口泰雄、専務=山口泰雄・佐伯聰夫、といった顔ぶれでした。

この理事会のもとで、1992年3月、奈良女子大学において第1回の学会大会が開催され、実質的な学会活動がはじまり、翌93年には学会誌『スポーツ社会学研究』も創刊されました。学会大会は、その後、香川大学、愛知教育大学、明海大学、宮城教育大学と順次開催されていきますが、とくに1997年の立命館大学のときは、池井望会長のもと、イギリス、アメリカ、フランス、韓国、デンマークなどからトップクラスの研究者の参加を得て、国際的かつ印象的な大会となりました。

全般的にみて、この10年間、日本スポーツ社会学会の歩みはほぼ順調であったといえるように思います。経済的にはいつもぎりぎりでしたが、そのことがむしろ、メンバーそれぞれの創意工夫、相互の連携プレー、手弁当を辞さない心意気などを育てた面もあります。私としては、今後とも、こうした「手づくり」の気風を失うことなく、余裕をもってゆつたりと発展していってほしい、と願っています。

新理事長挨拶

松村和則(筑波大学)

「そらあ松村はん、やらにやあかんよ。」という小谷前理事の一言で、私の意図とは全く異なった方向へと会議は流れ、井上・池井両先生が「松村君ももうそんな年になったんよ」とお二人そろって例のニコニコ顔でおっしゃられては、もはや抗う術はありませんでした。

会長や理事長等という役回りが回ってくるのは、引退を控えた大ベテランの研究者であるとずっと信じて疑わなかったものですから、正直なところ大ショックでした。というよりも、私自身まだ回り道ばかりしておりますから、「スポーツ社会学」に対して未だ何も貢献しておりませんので、とてもお引き受けする役ではないと思った次第です。

しかし様々な思いはあれども、会長を平野先生がお引き受け下さったことも重ね合わせて考えてみると、できるだけのことを10年を経過した今の時期にしなくてはいけないのかなとも思いました。学会を立ち上げるときに舞台裏でお手伝いしながら、この学会が本当に10年も続くとはその当時思っておりませんでした。ここまでこれたのは、井上前会長、平野会長をはじめとして、亀山さん等の社会学出身の研究者の牽引力があったからだと思います。ブルデューの言を引くまでもなく、社会学領域の研究者がこの「スポーツ」をテーマとすることにはある種のためらいがあることを十分承知していました。しかしながら、多木浩二氏がスポーツをテーマとして一冊の本を書いたり、若いブルデュー研究者の倉島会員が武術を何のためらいもなく取り上げて自らの研究テーマを深めようとしている様子をみていると、私の拘りが逆に時代を背負っていることがよく分かります。

さて、大量消費社会としての現代社会がスポーツの記号的消費を増大させていることが背景にあることはいうまでもないのですが、研究領域のボーダーレス化はスポーツにまで押し寄せて、社会学の対象としてスポーツは格好の材料を提供するという認識が広く受け入れられて来つつあると思います。さらに、社会学における身体論の普及(理論社会学・文化社会学ばかりでなく、都市社会学、教育社会学などの領域において)が媒介項となってスポーツへの社会学者の視野が広がっていることはすぐに了解しうることです。それでは、体育出身者(こうした二分法は大変陳腐なことは知りつつも)がこの「スポーツ社会学会」に何を期待し、どう自分たちの関心を広げようとしたのかは霧の中にあって判然としません。さらに言えば、どんな研究遺産をもってこの「スポーツ社会学会」という「場」に集うのか、ある意味では学会発足時に問わなくてはならなかつた点をそのままに残して第2ラウンドへ入ってきたといえないでしょうか。研究が学問的蓄積の上にしか成り立たない、などと今更言ってみても何の新味もあるわけではないのですが、体育出身のスポーツ社会学研究者の一人として自省します。

もし、体育出身のスポーツ社会学研究者がスポーツの現場をよく知っているという自負があるのであれば、その汗の臭い、スポーツ人たちの心とその社会を自らの社会学理論に染み込ませるように努力することが必要でしょう。もっとSubstantive（「実証」的、事例的）な研究が蓄積されることが理論的考察の傍らで必要だと思います。Ethnographical Imagination（「実証」的想像力）がもっと発揮されるようになれば、ブルデューの「資本」概念の功利主義的な側面やワッカントのボクシング研究の「フランス風」を、自らのスポーツ研究を携えて批判することができるようになるのではないか。こうした野心は、集中砲火を浴びることは必然でしょうけれども…。

いずれにしても、これから第2ラウンドは社会学の蓄積に依存したスポーツ研究からどう新たな展開をめざすかという新しいステージに入らなくてはならないと思います。その意味で体育出身か社会学出身かというような過去の二分法的な発想も自然と消滅していくのだろうとも思います。社会学の蓄積に全く依存しないで新たなスポーツ社会学を構想できるとは考えにくいのですが、スポーツ社会が全体社会と全くの相同性をもって動いていると考えるのであれば私たちの学会が今後存続する可能性は少ないでしょう。

また、一般的なスポーツという言い方に慣れすぎているのではないかとも思います。スポーツは具体的には個別の野球、サッカー、…ここカナダではスポーツといえば「ホッキィ」…なのであって「スポーツ」は単にそれらの総称です。近年は野球の社会学や武道・武術の社会学、相撲の社会学、スキーの社会学などがでてきていますが、この個別のスポーツの社会学がもっと積み重ねられていく、種目間にある社会学的差異の考察などが進んでくるとともに面白い研究がでてくるのではないかとも考えます。

理事長就任のご挨拶をするようにという事務局の注文でしたが、話がどうも違う方に広がってしまったようです。会員数も発足時の2倍半に膨れ上がりました。しかし、研究の量と質が十分かというとそうとはいえないと思います。研究誌に投稿される論文は確かにレベルが向上してきていますが、量的にはそれほどでもありません。また、他学会の専門誌のように業績づくりの場と化す危険性も孕んでいます。さらに、大学研究者以外の会員を引きつける術を考える必要があるかもしれません。個人的な努力に負ってきた学会開催時に海外からのゲストをよぶ慣例はどう存続していったらよいか、様々な課題を引き続き抱えながらの学会運営となります。どうか会員の方々の「手づくり学会」の良さを生かしたヴォランティア・ワークを期待しております。

まとめ役として不足のあることは承知の上のこの度の就任です。何とか2年の任期を全うして次の理事会にバトンタッチするためにも会員諸氏のご指導・ご尽力を切にお願いしてご挨拶と致します。

(2001年5月 トロント大学にて)

旧理事長挨拶

森川貞夫（日本体育大学）

ちょうど世紀の変わり目に、しかも日本スポーツ社会学会発足の10周年を井上会長の下に無事終了できたことをみなさんと共に喜びたいと思います。

理事長という役は会長と事務局長に挟まれて全くと言っていいほど、仕事らしい仕事はありませんので何かをやり遂げたと言うほどの気持ちはありませんが、懸案であった日本学術会議の登録手続きを前の奈良女子大学から引き継いで小椋事務局長のところで登録完了、初めての学術会議会員選出に私が会長に代わって投票をしてきました。東京乃木坂の日本学術会議の会場で社会学系の方々と混じって会員選出のすべてに関わることができたということは、これで日本スポーツ社会学会も他の社会学関連の学会と肩を並べて日本の学術発展になにがしかの貢献ができるのではないかと、その時、私は確信しました。

すでに総会時の井上会長の「挨拶」に尽きたと思いますが、あえて蛇足として申し上げるとすれば、これからは名実共にスポーツ社会学の研究活動や学会活動のすべてを通してもっともっと世間にアピールしていくような新しい段階に来ているのではないかとも思います。

そのような意味を込めて、新世紀が文字どおり伸世紀につながるよう、この新しい飛躍の時期の大変な舵取りをお願いする次の理事会のメンバーと会員諸氏の今後益々のご活躍を祈念して理事長交代の挨拶に代えさせていただきます。

新研究委員長挨拶

— 21世紀の夢 —

杉本厚夫（京都教育大学）

在外研究員の任を終えて英国から帰国し、まだ時差ぼけが治らない時の理事会で、あまり深く考えることなく、研究委員長をお引き受けいたしました。いま、こうして研究委員長としてのコメントを求められて、改めて事の重大性を認識したという次第です。しかし、お引き受けした以上、そのResponsibilityは果たしていきたいと考えております。

さて、日本スポーツ社会学会が発足して10年、着実な歩みを続けてきました。そして、とても魅力的な学会に成長してきたと思っています。とりわけ、学会の根幹である研究は、歴代の研究委員長のご尽力によって、シンポジウムを中心に、その成果が確実に蓄積されてきました。また、会員によるスポーツ社会学関係の研究出版物も増えてまいりました。それと同時に、スポーツ社会学という言葉が市民権を得て、定着して来た10年であったと

言えるでしょう。

そこで、これらの成果をふまえつつ、さらに21世紀を見据えた質的転換を図るため、次の3点について提案したいと考えています。もちろん、このことは、研究委員会や理事会にお諮りしたものではありませんので、あくまで、私の夢と受けとめて頂き、皆さんの忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。

1) 奨励研究：学会の維持発展には若い人材の育成が欠かせません。独創的な研究には、学会として全面的に支援していきたいと考えています。とりわけ、学問領域を越境した学際的な（interdisciplinary）研究を奨励していきたいと思います。さらに、これから的研究者を育していくために、スポーツ社会学の教育プログラムの開発も積極的に進めていきたいと考えております。

2) 国際研究：日本から海外へ向けての情報発信が少ないという声も聞いております。そこで、国際スポーツ社会学会、北米スポーツ社会学会、アジアのスポーツ社会学関連の組織等とパートナーシップを持ち、共同研究の推進や学会大会を開催していきたいと思っています。そのためには、ホームページの連携による情報の双方向性が不可欠であると考えています。また、来年のサッカーワールドカップの日韓開催を機会に、アジアから世界に向けてのスポーツ社会学を発信していきたいと考えています。

3) 臨床研究：ここ数年、臨床という言葉が流行しています。臨床心理学、臨床哲学、臨床社会学、臨床教育学…。これらは基本的には、研究成果の社会還元であると考えます。そこで、スポーツの社会問題を臨床的な視点からとらえ、その研究成果をどのような形で社会に返していくことができるのかの可能性を模索していきたいと思っています。そのためには、スポンサーシップによるシンポジウムの開催やメディアとの連携による研究を進めが必要かと思います。

これらの提案は、たたき台に過ぎません。会員の皆さんからのアイディアを頂き、スポーツ社会学研究を充実していきたいと考えております。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

前研究委員長挨拶

龜山佳明（龍谷大学）

二年間にわたる研究委員長の職を下りて今はほっとしています。といっても、在職中はたいしたことできなかつたのですが、やはり気にはなっていたようです。学会が発足して十年という節目にこの大役を引き受けなければならなくなつたわけですが、何をしたらよいのか、戸惑うばかりでした。そこで、三つばかりの基本方針を皆様にご披露したのですが、要はもう一度初心にかえってやり直しましょうというものでした。

この目標がどこまで実現できたのか、あやぶまれるところですが、シンポジウムもこ

うした方針のもとづいて実行してきました。「20世紀のスポーツ」という標題のもとに二年間にわたるシンポジウムを組むことにしたのですが、皆様の評価はいかがでしたでしょうか。私としまして良かったと思えることは、この計画が学会誌と連動して進行できることでした。こうすることにより、この学会が当面なにを目指しているのかがあきらかになるであろうからです。

ともかくも、大役を無事に終えることができましたことは、研究委員の方々の、かつまた、会員の皆様の寛大なるご支援の賜物と厚く感謝をいたしております。

新編集委員長あいさつ

伊藤公雄（大阪大学）

平野新会長のもとで新しい理事会が開催されたとき、例のごとく担当役員の決定の議論があった。前回は、うまく役付けを逃れていたので、今回は何かあたるかとちょっとひやひやしていた。というのも、池井会長時代、研究活動委員長を担当して、かなりいたいへんだったからだ。特に、国際シンポジウムなどという大仕事が入ったために、思い出しても、「ああ、たいへんだったなあ」というつらい（もちろん楽しいこともあったが）思い出が頭をよぎったものだ。もっとも、このときは、菊さん、山下さん、さらに杉本さんといった強力なスタッフがいたから何とかできただことで、ぼくは、お飾り委員長でそれほどこのことはしていなかったのだが…。

何とか逃げようとしていたが、結局、編集委員長ということになってしまった。もっとも、菊さん、荒井さん、清水さん、さらに池井元会長という強力なメンバーが参加してくれるということで、ちょっと安心したのも事実だが…。

実は、『スポーツ社会学研究』の編集は、これがはじめてではない（そのことも、最終的に、お引き受けした理由のひとつだ）。学会創立期、3年間、編集委員をした経験があるのだ。そのときは、江刺委員長のもと、池井さん、山口さん、菊さん、影山さん、さらに小椋さんがメンバーだったと思う。最初ということで、投稿規程から装丁まで、ずいぶんと議論したことを思いだす。苦労はあったが、編集委員会という場を通じて、それまでおつきあいのなかつた多くの方々と親しくさせていただいたという、いい思い出もたくさんある。

振りかえってみれば、あれからもう十年。つまり、『スポーツ社会学研究』は今回、第十号という記念すべき号になる。そこで、創刊に関与したということも含めて、今回は、十号記念という形も考えようということになっている（詳細は、投稿の呼びかけの記事をご参照ください）。

関西中心の委員会ということで、例のごとく、京都のタワーホテルの八階ロビーが会議

の場所になっている（ホテルの人たちからは、たぶん、相当わけのわからないグループだと思われていることだろう）。ここでは、創刊号の議論もしたし、国際シンポジウムの時は、月に何度も集まって準備の会合をもったものだ。また、ここで、これから何度も編集委員の人たちと落ち合い、議論することになるのだろうと思う。たいへんだんだなあという思いと、まあ、みんなでわいわい楽しくやって行こうという思いとが、今、頭のなかを飛び交っている。次の時代へ向かって、学会の発展のためにも、何とかシコシコやっていこうと考えている。どうか、みなさん、ご協力のほどよろしくお願いします。

旧編集委員長挨拶

—バトンタッチの弁—

佐伯年詩雄（筑波大学）

3代目の編集長として、スポーツ社会学研究9号と10号の編集をお世話いたしました。投稿者の方々、編集委員・同幹事及び査読協力者の方々のご支援により、大過なく業務を行えましたこと、心より感謝申し上げます。

当初、二桁に満たない投稿状況を憂慮して、急遽特集テーマを設け、依頼原稿の掲載を行いましたが、幸い大幅に投稿数が伸び、今度は査読の大変さに嬉しい悲鳴をあげることとなりました。アカデミズムのスタンダードを遵守しながらも、内容やメッセージの面白さ、その独自性を評価する審査が行われたように思います。この調子で行けば、近い将来、年2号の出版も可能となることでしょう。嬉しいことです。

とは言え、編集業務にはかなりきついものがありました。投稿数が少なかった時期の名残でしょうか、投稿規定が必ずしも守られないことも少なくありません。また、査読結果の不統一や評価のズレの調整は、なかなかの苦労で、評価項目を作つてポイント制で行う審査方法も考えられました。しかし、なんとも味わいの無いものとなるので、それは避け、編集委員会の尽力に委ねました。採択が決定してもなお業務は大変でした。原稿の割付や誤字脱字のチェック、例えば引用文献のスペルチェック等が結構手間のかかる事で、東方美奈子幹事の献身的な尽力でようやく片づけることが出来た次第です。それにしてもミスは起きるもので、印刷所の責任とは言え、10号の発行が遅れてしまいました。学会大会時にお渡しきれなかったことを悔やむと共に、心よりお詫び申し上げます。

「スポーツ社会学は面白い」という状況が生まれつつあるように思います。この流れを承けて、スポーツ社会学研究が一層充実することを祈念し、バトンタッチと致します。

『スポーツ社会学研究』の編集・投稿 及び販路拡大に関するお願ひ

編集委員会委員長 伊藤公雄（大阪大学）

今年度の投稿について

『スポーツ社会学研究』の投稿に関するご案内を致します。多くの投稿をお待ちしています。

* 投稿締め切り日 2001年8月24日（当日消印有効、厳守）

* 投稿要領 『スポーツ社会学研究』第9号（2001）143-145頁参照

* 論文等の送付先は、以下にお願いします。

〒565-0871 吹田市山田丘1-2 大阪大学人間科学部 伊藤研究室気付

『スポーツ社会学研究編集委員会』

第10巻目を迎える『スポーツ社会学研究』と編集スケジュール

『スポーツ社会学研究』は、今回で記念すべき第10巻となります。編集委員会としても、この第10巻を記念し、「この10年を振り返る」形での座談会や特別寄稿論文の依頼を準備中です。

会員の寄稿論文については、以下に述べるようなスケジュールに従つて、従来通り進めしていく予定です。ただし、近年、投稿論文の増加にともない、編集作業に多くの負担がかかっています。その結果、論文を投稿される会員にもさまざまご不便をおかけすることが増えているようです。そこで、今回は、査読の時間をやや短めに設定させていただき、二度査読をしていただく体制をとりたいと思います。査読していただく会員には、無理なお願いをすることになるかもしれません、よろしくお願いします。最終責任を編集委員会が担うのは当然ですが、査読という形を通じて、できるだけ多くの方のご協力をあおぐなかで編集作業を進めていきたいと思います。

<編集スケジュール>

8月24日 原稿締め切り

8月末 第2回編集委員会査読者決定・査読依頼

9月21日 査読の結果報告締め切り

9月末 第3回編集委員会 執筆者への査読結果連絡、必要があれば、修正依頼など

11月6日 修正された原稿締め切り日／必要があれば、査読者への再度の査読依頼

12月4日 二度目の査読の結果報告締め切り日

12月8日 第4回編集委員会 必要があれば、コメントをつけた上で執筆者に最終原稿の執筆依頼

1月上旬 原稿の最終締め切り（フロッピー入稿）／印刷屋さんに依頼 校正（1回のみ）

2月末から3月初旬 最終の印刷開始

3月末 学会大会で配布

投稿規定の厳密な適用

最近、投稿規定に必ずしも従っていただけない論文も目だっているようです。編集委員会としては、「管理主義」は好むところではありませんが、スムーズかつフェアな編集のためにも、厳密に適用していこうと考えております。特に、執筆の字数は図表も含めて16000字である点、および、引用文献の記述の仕方については執筆要項に従っていただくこと、などについては、査読の際、審査の対象として考えていきたいと思います（執筆字数については、理事会で20000字以内に拡張する説も出されました、「16000字でまとめるのも芸の内」という声も出され、当面、その方向でいくことになりました）。

『スポーツ社会学研究』販路拡大のお願い

「注文の多い編集委員会」ですみませんが、『スポーツ社会学研究』の販売拡大へのご協力も、ひき続きよろしくお願ひしたいと思います。本誌は、法政大学出版局の協力で、一般書店の店頭でも販売されましたが、「本が売れない時代」のなかで、特に学術雑誌は売れ行きが悪く、現在取次店が一店のみという現状で法政大学出版局にも多大の迷惑をかけてしまっているようです。

その意味で、学術雑誌としての「品位」を保ちつつ、しかも一般読者の目もひきつけるような編集が一層望まれるのだと思います。もちろん、編集委員会としてもそうした工夫はしていくつもりですが、「それはいっても…」というのが実情です。そこで、販売拡大という点で、会員のご支援が必要です。とくに、会員が所属している大学や研究機関で、まだ定期講読をしていない場合は、ぜひ『スポーツ社会学研究』を講読していただけますようお願いします（学術情報システムに詳しい会員から、「会員のいる大学で定期講読していない大学がある」などという声も出されているようです）。

個人的には、「情報化」のマイナス面だと思いますが、困った時代です。もちろん、いろいろご事情がおありでしょうから、「無理やりにでも」とは申しませんが、余裕のある大学・研究機関では、図書館の情報をチェックの上、ご協力をたまわれればと思います。

また、販売戦略として、10巻を記念して合本企画も考慮しています。すでに、1～3巻は、欠番になっています。欠番の巻をマスプリントし、1巻から10巻までを合本化したものを注文販売の形で売り出したいと思います。この点でのご協力もどうぞよろしくお願ひします。

国際交流委員会からのお知らせ

野川春夫（順天堂大学）

平成12年度を締めくくる第10回日本スポーツ社会学会では、シンポジウムⅡ「スポーツの20世紀：スポーツとグローバリゼーション」において海外から2名のパネリストを招聘し、20世紀のスポーツの伝播・発展を国際的な視点から総括するとともに、21世紀におけるスポーツ及びスポーツ研究の方向性の展望・検討を試みた。

平成13年度は、コンフェデレーションズ・カップに代表されるように2002W杯の前年として日本と韓国において各研究領域で様々な国際交流が行われると予想される。スポーツ社会学の分野も例外でなくW杯を題材とした国際交流が活発に行われると予想される。本年度開催される国内の国際シンポジウムや海外の学会を本稿で紹介する。

国際スポーツ社会学会（ISSA）主催の「第1回世界スポーツ社会学会」が韓国ソウルの延世（Yonsei）大学で7月20日～24日に開催される。メインテーマは、「Sociology of Sport and New Global Order: Bridging Perspectives and Crossing Boundaries（スポーツ社会学と新たな世界秩序：異なる観点への橋渡しと障壁の超越）」。また「スポーツと新たな世界秩序」、「異なる観点への橋渡し」、「障壁の超越」をサブテーマとしている。一般発表とポスター発表を設定するとともに、2002年W杯のシンポジウムも企画されている。基調講演者としては、ジョン・ロイ（米国）とエリック・ダニング（英国）及びカリ・ファースティング（ノルウェー）の3名が決定している。また、三つのサブテーマのスピーカーとして山口泰雄（神戸大学）、パート・バンラッセル（ベルギー）、ジョー・マグワイア（英国）、ピーター・ドネリーとバリー・ホウリハン（カナダ）、及び野川春夫（順天堂大学）が招待されている。

一般発表とポスターセッションも企画されているので、日本からも多数の参加が見込まれている。さらに「2002年W杯」シンポジウムが開催され、基調講演者にアラン・トムリンソン（英国）、日本人スピーカーとして清水諭（筑波大学）が招待され、活発な議論や意見の交換が期待される。大会組織委員会の事務局長は、ソウル国立大学のDr.Eunha Kohが務めている。差し迫った大会の詳細は、大会用のホームページ（<http://plaza.snu.ac.kr/~congress/>）または大会事務局（ehkoh@snu.ac.kr）に問い合わせられたい。

北米スポーツ社会学会（NASSS）はテキサス州サンアントニオ市において10月31日から11月4日に第22回大会をギュンターホテルで開催する。アール・スミス（ウェークフォーレスト大学）を実行委員長として、大会コーディネーターは3年連続でディーン・パデュー（ボウリンググリーン大学）が務めている。大会のメインテーマは「Marginality, Power and Sport」となっており、特に障害を持つスポーツ選手への未解放（special emphasis on the disenfranchisement of athletes with disabilities）に着目したテーマとなっている。一般発表としては、「スポーツと消費者行動」、「スポーツと人種」、「障害スポー

ツ」、「アフリカ系アメリカ人女性とスポーツ」、「大学スポーツ」など、例年通り多彩なセッションが設定されている。アメリカとカナダを中心とする学会であるが、最近は日本を含めたアジアからの参加者が減少している。ちなみに1990年まで行った「アジアセッション」は今年も都合により開催しない。本大会の詳細は、nassserv@listserv.bc.eduか、smitheas@wfu.eduまたはdpurdy@bgsu.eduに問い合わせられたい。

国内の国際会議としては、日本体育学会において北海道大会本部企画の「2002年FIFAワールドカップ日本・韓国」が9月26日に開催される。本シンポジウムはW杯の日韓共催が決定した1997年から韓国体育学会の提案によって毎年1回韓国で開催されてきた。今回は第5回を迎え、初めて日本で開催されることになった。「2002年FIFAワールドカップ日本・韓国」開催が若者のスポーツ文化へ及ぼすインパクトをメインテーマとし、サブテーマとして人文社会科学系の「地域社会におけるスポーツ的なライフスタイル形成と若者のスポーツ文化」と自然科学系の「若年競技者のタレント発掘、育成と健全なライフスタイル形成」を設定した。本シンポジウムの企画立案は、日本体育学会の国際交流委員会(委員長：平野裕一)が行い、北海道大会本部(担当：須田努・宇留間)と連携してシンポジウムの運営に当る。日時は、9月26日(木)18:00-20:30、場所は札幌市内の「かでる2・7」となっている。日本側のシンポジストの選出に、今回初めての試みとして公募制を取り入れ、テーマに精通し意欲の高い研究者を募った。その結果、人文社会科学系の発表者は川西正志(鹿屋体育大学)、自然科学系は星川佳広(浜松ホトニクス)に決定した。韓国サイドの発表者は現時点では未定である。

なお、本学会の第11回大会における国際シンポジウムの企画は現時点では未定である。最後に、本学会における国際交流に関する会員諸兄のご希望等を提示していただくような機会を是非持ちたいと考えています。双方向的なコミュニケーションを築けるように努力していきます。

(文中敬称略)

第10回 学会大会特集

●実行委員会あいさつ

日本スポーツ社会学会第10回記念大会を終えて

大会実行委員長 佐伯年詩雄(筑波大学)

10周年を記念して、初めての2泊3日の大会でした。また、種々の理由から、一般発表からスタートするという異例のスケジュールで、出足を心配いたしておりました。しかし、初日午前の雨にもかかわらず順調に進行し、最終的には200余名の参加者を迎えることができました。参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

24題の一般発表、二つのシンポジウム、そして二つのテーマセッションという盛り沢山のプログラムでしたが、いずれも盛況でした。最終日には、会場借用の制限時間を超えて、熱心な議論が続くところもありました。こんな様子から、スポーツ社会学研究の面白さ・魅力が緩やかですが着実に浸透していると考えることは甘すぎるでしょうか。ともかく、主催者としては嬉しい悲鳴でした。

シンポジウムに2名、テーマセッションに4名と、海外から6名の研究者が参加されました。短い時間でしたが、熱心な国際的交流が展開されたように思います。招聘に尽力されました立命館大学山下高行氏には心より感謝いたしております。これからは、スポーツ実践のグローバリゼーションに遅れることなく、研究も国際化が普通になることでしょう。

さて、研究発表や討論の質的な評価は後代に譲るとして、皆様のご協力により創設の節目を飾る大会は無事に終了しました。主催者側としましては、皆様のスポーツ社会学に関する自由な発想がのびのびと表現され、多様な意見が交換されることを重視しました。また、アカデミズムのフレームを越えた広い参加も大切にしました。これが創設以来の本学会の基調と思うからです。この、良き伝統の継承を願って、第11回大会にバトンをお渡しいたします。

●基調講演

「近代日本のエリートとスポーツ」(竹内 洋)

甲斐健人(愛知教育大学)

竹内洋氏による基調講演では主に「エリート」層における教養主義とスポーツについて論じられた。まず、教官たちの振る舞い方の違いを出身高校と結びつけるとよくわかると

いう学生時代のエピソードによって話題は学校文化、エリート校へと導かれる。氏によれば、日本のエリート養成機関である旧制高校の学校文化はもともとは蛮カラ的だった。その後、蛮カラ的因素を引き継ぐ運動部と教養主義的な文化部との勢力争いに弁論部が加わり、少しずつ教養主義的文化が学校文化の主流を占め、大正教養主義へつながっていったという。さらに、日英のエリート層をスポーツへのかかわり方について比較すると量的にも質的にも大いに異なることも指摘された。パブリックスクールなどで積極的にスポーツに取り組む英國エリート層に対し、日本の学歴エリートにおいては運動はメインの位置におかれではなかった。これらをふまえて、日本においては運動部文化は教養主義と対抗関係に位置づくことになったのではないか、エリート文化にはスポーツがきちんと位置づけられてこなったのではないか、という指摘がなされた。最後に、今後はスポーツは教養として大いに重要ではないか、今後の大学教育においてはスピーチとスポーツは重要であろうとコメントされ、講演を閉じられた。

ご自身を「スポーツ嫌い」とおっしゃった竹内氏ではあるが、最近、スポーツに関する執筆もなされている。振り返ると、氏がスポーツ研究やスポーツをすることの意義についてどのように考えておられるのか、教養や教養主義をどのように理解しておられるのかなど伺っておけば良かったとも思う。いずれにしても、エリート（大学）に関する自説の披露、「傍系」帝大生の活躍、軍事訓練とも関係した日英エリート層の身体性に関するコメントなどもまじえながらの約1時間は私には非常に短く感じられた。

●シンポジウム1

ス ポ ー ツ の 20 世 紀 —スポーツとテクノロジー—

亀山佳明（龍谷大学）

前年度に引き続いて「スポーツの20世紀」という総題のもとで、本年度は「スポーツとテクノロジー」というテーマでシンポジウムが企画された。スポーツの発達はテクノロジーの発展と深くかかわっていることは明らかである。この両者の関係は20世紀の特徴でもある。そこで、このシンポジウムにおいてはこの関係をメディア、身体加工、製品開発という3つの角度から取り上げてみようとした。以下において、発表者の内容を簡単にまとめておきたい。

(1) スポーツとメディア（渡辺潤氏 東京経済大学）

渡辺氏は、メディアとの関係において、スポーツと音楽（ロック）との相同性を指摘された。すなわち、この両者はともにメディアのおかげで飛躍的な発展をとげたのである。

これはアメリカにおいて典型的であるが、日本においても同じである。さらに、これらはともに社会の階級の底辺部から中層部・上層部へと影響を行使する。とくに、合衆国においては20世紀の後半においてこうした影響が顕著に表れた時代であった。また、この両者は国家やイデオロギーの違いを越えて、拡大する傾向を強くもっている。こうした動きもメディアなくしてはあり得ないことがある。とくに興味を引かれたのは、80年代においてこの両者の影響が交差するという指摘であった。たとえば、ロックと麻薬とは密接な関係にあったのに、80年代にはスポーツがそのお株を奪ってしまうということなど。

(2) テクノロジーと身体加工（柏原全孝氏 追手門大学）

スポーツの発展は同時に身体の加工もしくは変形を伴わずにいる。柏原氏はこの両者のあいだにテクノロジーの発達という変数をいれるとき何が起きてくるのか、を発表された。とりわけ、ドーピングという現象に注目しながら説明された。スポーツが身体に要請して来たのは身体=機械のイメージではなかったか。とするなら、それは肉体としての身体はいうにおよばず、精神としての身体においても例外ではないだろう。たとえば、現代のスポーツにおいて盛んなイメージ・トレーニングなどはそのようなものとみなすことができるのではないか。このように考えるなら、ドーピングも肉体と精神という二つの領域に分けられるものではないのではないか。また、スポーツがめざす身体とは究極においてサイボーグ的な身体なのではないだろうか。このように、柏原氏はわれわれスポーツを研究するものに刺激的な問題提起をなされた。

(3) スポーツ用具の改良とスポーツの変遷（金子靖仙氏 ミズノ株式会社商品開発部）

スポーツ用具の進化は競技のスタイルをも変化させずにはいない。たとえば、オリンピックにおける100メートル走は100年で約1秒記録を短縮して来たが、そこではシューズの開発が大きな影響を与えてきた。シューズの軽量化は極限まで追求してきた。1987年には選手とともに開発に取り組み約30グラムの軽量化に成功し、29.0センチ片足165グラムのシューズの開発に成功した。その結果、1988年のソウル・オリンピックでは金メダルを獲得することができた。こうした開発が以後極限まで追求されて来たが、これによって走るスタイルにも変化が生じざるをえない。素材開発（軽量化）の次に企業が目指すのはバイオメカニクスであろう。これは生体の構造や運動の合理性、合目的性を力学的視点から解釈する学際科学であり、生物学、生化学を核にした、機械力学、材料力学、熱力学、流体力学などの工学と体育学が結びついたものである。サメの皮膚を模した水着はそうした成果であるが、21世紀はこの領域に焦点が移ると思われる。金子氏によるこれらの指摘は現場ならではの臨場感があった。

さて、以上の発表をめぐって会場からは多様な質問があった。特に後者のお二人に集中した感があったが、司会者としては渡辺氏の発表にももっと注目していただきたかった。

また、スポーツとテクノロジーについて考えるにさいしても、平野秀秋氏が2000年度の学会誌に発表されていたように、巨大化する国家、市場経済と巨大国家との結合、科学の奇形児である「科学技術」の三者の関連においてとらえる必要のあることを、最後に指摘しておきたい。

シンポジウムに参加して

東元春夫（京都女子大学）

筆者の関わるアメリカンフットボール（以下「フットボール」と略す）はおそらくテクノロジーと大きく関わる競技のひとつといえよう。渡辺潤氏はスポーツとメディアの関係を音楽との比較において論じたが、これはユニークかつ卓越した視点である。スポーツとマスメディアの共生関係は既に指摘されているが、スポーツも音楽もひとつの「文化」としてメディアに把握される場合、そこにはスポーツと音楽との共生関係もまた見えてくる。その典型は1993年スーパーボウルでのマイケル・ジャクソン主演のハーフタイムショーである。「共生」とはいえ、最近はメディア側から的一方的な要求が目立つ。大学フットボールは伝統的に土曜日のゲームであったが、テレビ側の都合にあわせて他の曜日、さらにゴールデンアワーにあわせてキックオフ時刻を変更するなど、テレビ優先の要求が目立つ。TVタイムアウトを始め、視聴者の要望を満たすため（つまり得点が入りやすいようオフェンス有利）のルール変更が近年顕著である。

次に柏原全孝氏はテクノロジーと身体加工について議論したが、これは薬物使用という点では極めて現代的な課題であるというのに加えて、「科学的トレーニング」という点で特筆に値する。日本の大学の体育会でさえ、「科学的」トレーニングによる精緻化されたトレーニングメニュー（食事を含む）により「最適化された身体」と「最適化された所作」が主流となりつつある。先日行われた関西学院大学対プリンストン大学のフットボールの親善試合での日本人ラインマンの平均体重が106キロであったことはその典型例である。フットボールはまさに「サイボーグ集団」の競技と観客の目には映る。

最後に金子氏が五輪男子陸上100M決勝で使われてきたシューズを例に、五輪がいかに技術開発を加速させてきたかをメーカー側の技術者として語った。フットボールのルール変更にもテクノロジーの進歩は如実に反映され、ヘルメットなど装具の面で「現実=技術が先行し、ルールが追認する」というパターンを辿ってきた。

このようにスポーツの可視性と人気が高まり、社会における大きな部分を占めるようになった20世紀は、スポーツとテクノロジーの間に部分的にではあるが強い双方向の依存関係が芽生えた時代と言えよう。

●シンポジウム2

「スポーツの20世紀:スポーツとグローバリゼーション」

野川春夫（順天堂大学）

20世紀はスポーツ世紀と呼ばれるほど、さまざまなスポーツやゲームがローカルからリージョナルへ、リージョナルからインターナショナルへと普及・発展してきた。本シンポジウムでは、昨年に引き続き20世紀のスポーツの伝播・発展を国際的な視点から総括するとともに、21世紀におけるスポーツ及びスポーツ研究の方向性を展望・検討すること目的とした。

パネリストには、キムベリー・シュメル（米国ケント州立大学）、金在温（米国アイオワ大学）、黄順姫（筑波大学）の3名を迎えた。佐伯と野川が司会を務めた。シュメルは、「グローバリゼーションとアメリカナイゼーション：スポーツ社会学におけるこれまでの議論を踏まえて」と題して、グローバリゼーションと同義語的に用いられているアメリカナイゼーションについての概念定義および北米スポーツ社会学会におけるこれまでの議論の整理をした。そして、スタジアム建設やプロチーム誘致などのスポーツを核とするアメリカ版都市開発モデル（Growth model）という別のアメリカナイゼーションのグローバル化が進行していることを指摘した。これは、メガスポーツイベントを契機とするスポーツ施設などの建設が都市開発を促進するというアメリカンモデルのグローバル化が世界各国に広がっていることを指摘し、早晚日本のW杯スタジアム建設が抱える問題点を想起させた。

金は、「国家の自尊心、地域的コンテクスト、グローバル化されたスポーツ大会」と題し、個人的な体験を通してナショナリズムに焦点を当て、グローバリゼーションに拮抗するナショナリズムの醸成と、極東地域における日・韓、日・中・韓の国際関係の文脈におけるグローバリゼーションとナショナリズムの関係を政治社会学的視点から説明した。また、概念定義やその妥当性の面では議論の余地があるものの、オリンピック及びW杯の成績とGDP・人的発達指数（HDI）などから日本などのスポーツ潜在力指数（SPI）を発表した。

黄は、「グローバリゼーションとナショナリズムの狭間におけるスポーツ戦略」と題して、ローカリズムの代表とも言える日本相撲と韓国相撲（シルム）の生存戦略に焦点を当て、シルムと相撲の生存戦略をビデオで紹介し、グローバリゼーションの潮流の中で伝統スポーツの固有性の保持と同時にグローバル化を図る戦略を紹介した。ローカルがグローバルを利用するしたたかさの必要性を指摘した。

本シンポジウムでは、筑波大学大学院生の方々が翻訳などに大変精力的に手伝ってくださったことに対して、この紙面を借りてお礼を述べさせていただく。

（文中敬称略）

●セッション1

「身体のフィールドワークについて考える」に参加して

松田恵示（岡山大学） 野崎武司（香川大学）

このセッションに参加するとき、ぼくの頭にあったのは『現代文化を学ぶ人のために』（井上俊編、世界思想社、1998）の中にあった、井上章一氏の次のようなコラムだった。「正直に言えば、（現代文化論を書く社会学者の）純理論派も理論に未練をもつ土着派も、私にはおろかに見える。現代文化の解析という点では、質のいいノンフィクションに、かなわない。私は、ノンフィクション作家のほうに、軍配をあげる（カッコ内筆者注）」。

「一般社会学にもの申す」という魅惑的なセッションの意図には、おそらくフィールドワークに含まれる、いわば「社会学を生きる」といった研究者やその研究自体の「身体性」への問いかけと、「身体性」が強く浮き出るような社会事象を対象とする社会学が持つ可能性への問いかけがあったのではないかと思う。だとすれば、先の井上章一氏への反論のひとつがなにがしかの形で表明されることにもなるのではないか。個人的に、このような興味・関心を持って各パネラーのお話を聞いていた。

鵜飼正樹氏は、自ら舞台に立たれるという、長期にわたる大衆演劇のフィールドワークを通じて、役者の身体が生成されていく現場について、スリルに溢れる語り口で御報告下さった。特に「役になりきることと役をコントロールすること」の同時性において、「そうであってそうでない」という、役者の両義的な演じる身体というものが獲得されていく様子は大変興味深いものであった。

また、甲斐健人氏は、5年間にわたる農業高校のサッカー部のフィールドワークの経験を通じて、調査者と被調査者の関わりについて視点をあて御報告下さった。特に「下層」に位置すると見られている学校文化や階層文化を記述するフィールドワーカーの目の位置というものを、研究と現場実践との相互影響作用の問題から鋭く批判される論点には強く共感を覚えた。

もうおふたかたの御報告については、あの野崎氏に委ねることを御許しいただいて、セッション終了後の感想を一言述べるとすれば、先に述べた「身体性」への2つの問いかけに対しても、井上章一氏への反論に対しても、「媒介」といった役割、あるいは、「どちらつかず」というある種のマージナリティの積極的な肯定ということが潜在的に表明された内容であったのかな、ということだった。残念であったのは、このような感想を確かめるほどには、報告時間が予定をオーバーし、セッションの中で議論の時間がほとんどそれなかった点である。フィールドワークを語るには、やはり少ない報告に対して「じかにかかわりながら」やりとりをすることが必要であったのかもしれないと思った。（松田）

事務局の仕事の関係上、参加することのできた倉島哲氏と好井裕明氏の報告についてここで感想を述べてみたい。倉島氏の報告は、「身体のフィールドワーク」というタイトルに相応しい、優れた研究発表であると感じられた。S流というマイナー集団の神秘的な身体体験への視線が、ブルデューを介して社会学のかなり分厚いところにまで鱗を走らせるかのようであった。「身体の線」というキーワードには、新たなことをリアルに浮き彫りにさせる力を感じた。その凄みをもっと大切にして欲しいとも思われた。例えば「抜きが甘い」と形容される事態がある。これはバイオメカニクスのようなものを介して「角速度」というような他の記号に還元できるかもしれない。しかし一般的に「筋がいい」「腕がいい」などと言って指し示されるものは、他の記号になかなか還元できない。しかしそれは空虚ではないものとして共感されてしまう。体験する諸身体に否応なく現れる「指し示しのネットワーク」が、当の身体に対して、深いアリアリティを伴った何かを生成させるというところに、倉島氏の研究の凄みがある。瀬尾恭子氏の新鮮な研究発表にも通じるものを感じた。コリオグラファーとダンサーが共にうごめきあいながら、動きを作っていく。ダンサーより先に新しい動きのインスピレーションを掴めて、ダンサーをリードできるときに、彼女はコリオグラファーたりうる。その<先に何かを掴む>という身体感覚と、選手が試合の「流れをつくる」ようなこと、そして武闘家の「身体の線」とは決して無縁ではない。そしてそうした微視的な出来事とマクロな社会は連なりあっているという洞察。倉島氏の今後の活躍に大いに期待したい。

一方、好井氏の報告では、まず、抱腹絶倒、軽妙な口調に意味深な語り、すべてに好井氏の人間的な厚みと半端じゃない批判精神を感じさせられた。それは身をこわらせながら被差別部落に赴いては、当事者や解放運動の活動家たちに「東大さんが泣っきよるでー」となじられる、そんな青年時代の分厚い体験の蓄積に支えられてあるものだった。生きた「社会学をすること」の、一つの大きな形に直面し愕然とする思いがした。筆者はつい「今日は当番なので先に失礼します」などと言うタイプである。家事分担の引き受けを、さも凄いことであるかのように語るときが確かにいる。それは分担を「普通のこと」と見なしていないこと、差別の視線をすっかり宿していることの露呈であると気づかされる。あの場で「私こそが女性を差別しているのだ」と自覚したとき、すこし楽になったように思えた。いわば好井氏の言う“カテゴリー化の呪縛”からの解放を味わったのだ。かの呪縛には、当該の諸身体に否応なく現れる「指し示しのネットワーク」との深い繋がりを感じた。好井氏自身、差別を「個」に還元して説明することを批判し、誰もが回避しない微視的な権力作用として、かの呪縛を描き出している。フィールドワークとは、そうしたネットワーク（権力の圈域）を横断することなのかもしれない。この横断の体感なくしてどこへ出かけようと、フィールドワークしたことにならないのかもしれない。それはハンセン病者の入れてくれた茶を飲むか／飲まないか、などの行為に重層する意味に對峙し、差別している自らの身体、日常的権力を行使てしまっている自らの身体に驚愕することもある。「差別から解放されている身体」などありはしない、「差別と向き合い、差

別から解放されたいと願うプロセスとしての身体」の実現、強制されるカテゴリーの形を“意味なきもの”とし新たなカテゴリーを生み出しうる身体の実現、それを阻む“何か”を「わたし」の目の前にとりだし、みずからの身体に突きつけていくこと、こうした好井氏の展望にすこぶる魅了された。

(野崎)

身体のフィールドワークを考える

松村和則（筑波大学）

このワークショップを構想したときに私の問題意識らしきものを長々と4人の報告者の方々に書き送りました。しかしながら、議論をこのような方向へ持っていきたいとは一言も申し上げず、日頃の調査・研究活動の線上で「身体のフィールドワーク」というタイトルで考えて下さいという趣旨を述べただけでした。報告の重点が「身体」、「フィールドワーク」さもなくば「身体のフィールドワーク」、いずれに置かれようとも構わないと考えたわけです。

社会学にまつわる潮流という点では、(1)フィールドワーク論（調査研究の見直しを含めて）が盛んとなる兆しがあること、(2)エスノメソドロジー関連の著作が目を引くこと、(3)スポーツ・武術など身体文化への関心が高まりつつあることなどがワークショップを開こうとした背景にあります。知識社会学的な関心が背後に隠れてもいますが、微視的な権力作用に注目することが自らの社会学実践を反省的に捉え、当事者性の問題をフェミニズム研究者から突きつけられる、といった社会学研究の幾つかの変化が「グランド・セオリー」から「グランディッド・セオリー」へという潮流を新たに生みつつあるのかなと考えました。いずれにしても様々な現実問題へ社会学者が真摯な態度で対峙しようとしたとき、構築主義か本質主義かといった議論だけでは満足し得ない居心地の悪さが敢えて研究者をフィールドワークへと駆り立てる現実があると思います。

さて、報告は若いスポーツ社会学者である倉島・甲斐会員が精力的に仕事を公刊している中堅社会学者の鵜飼、好井両氏にチャレンジするというスタイルで始まりました。

- 1) 倉島哲（京都大学大学院）：フィールドワークにおける言語・身体・時間
- 2) 甲斐健人（愛知教育大学）：スポーツする身体を考える
- 3) 鵜飼正樹（京都文教大学）：「演技する身体」を／から考える
- 4) 好井裕明（広島国際学院大学）：「差別する身体」を考える

倉島会員は、ブルデューの「ハビトゥス」概念が「精神—無意識の身体技法」という二

元的図式にとどまっており、主体なき構造主義の陥穰を免れていないという問題意識から「反省的な主体」は「示しのネットワーク」と「身体的な感覚」を当事者の時間の中に投じて行くことで、自らを含めた当事者の言葉「身体の線（からだのせん）」にいきあつたといいます。そして「資本」や「戦略」といった科学者の言葉に回収されない当事者の実践感覚に迫ること（調査者が体を投じて共有しようとする事によって）が新たな社会学を構想しうるのではないかという野心的な報告を試みました。

甲斐会員は、氏自らの5年に及ぶ農業高校における実践活動をふまえつつ、教育社会学領域で精力的にエスノグラフィーを産出する志水宏吉氏のフィールドワークは「あらかじめ用意した見取り図」に強く依存したものではないかと批判しました。また、研究者自らを「」にくくっておいて（書き手の社会的地位も含めて）「倫理」を語ることはできないし、教育実践と研究との関わりをもっと慎重に検討すべきだともいいます。「スポーツする身体」をフィールドワークするときにこのような研究者の「構え」は研究対象である「ノーリン」の生徒たちによって軽くいなされてしまう。そうした「事実」は確かにフィールドワークの産物として「理解」する事はできますが、それが社会学理論のどこを糾弾し、どう独自に展開しうるのかという点については述べる間もなく時間が来てしましました。

鵜飼さんの報告は、その点からいうとこの「構え」が見えず、格技で組んだときに体感する「したたかさ」「しなやかさ」を感じさせる「奇妙な」ムードがありました。「悲しい役をやっていると、自然に涙が出る」という時、いうならば「『役』になりきる」心身一元論でも、「『泣かない』で『泣かせる』のが腕」という「『役』をコントロールする」心身二元論、いずれにもなじまない自分がいたことを芸能者としての実践を通して述べられました。「悲しんでいるかのように身体を操る」ことは、「演技ではない演技」であって、役が消え去った自分が舞台の上にいて観客と交感しているのだともいわれます。こうした日々の暮らしの中に芸能がある「大衆演劇」の世界は、社会学の用語で処理してしまうことができないし、そうする自分を許さない現実があるともいわれました。

好井さんの報告は、自らを敢えて厳しい状況である「差別」状況に据えて社会学を実践することは、「生きる手がかりとして」差別を「より積極的に活用できないか」と考える、いうならば自らの「構え」を認めつつ、それを傍らに置いて対象に向かっていくスタンスを表明したものでした。意識論的・行為論的な差別の解きほぐしは、差別の現場から離れて「個」に還元してその原因を探るものであり、「差別する身体」という観点は差別を「関係」の中で捉えなくては見えないものだと捉えます。そして、自らの「こわばり」の身体を「ゆらぎ」の身体に変えていく実践が社会学であり、暮らしでもあるという趣旨を述べられました。つまり、この身体的「こわばり」は、社会の構造やカテゴリー化する社会学に由来するものと一方的に避けないで、自分で引き受けてしまうのが好井流で、その自省的な身体を生み出そうとする日常的な実践の中に社会学を位置づけ直す必要があるといわれたのだと思います。

4人のご報告を聴いていて、その人となりと自らの社会学が近いところにある、というよりそれを近づけて行こうとする意思を感じました。また、社会学をよそよそしいものにしておくのではなく、もっと人々や暮らしに近づいて社会学実践を行うという姿勢を共有されていたと思います。かつて、権田保之輔、鈴木榮太郎の都市社会学などの古典を読んだ時に感じたもの、あるいは井上さんの『遊びの社会学』の中に隠れている人や社会を見る目の優しさなどを思い起こさせてくれるものでした。

人々の暮らしに近づくといつても、その人々に対して屹立するもの（鈴木都市社会学であれば「結節機関」など）をどう社会学するかという問題は依然と残されており、好井さん流にいえば「逃げない」で差別が立ち現れるそのプロセスを社会学するということになるのでしょうか。いずれにしても、特に非会員であるお二人、鵜飼さん、好井さんにはわざわざ私たちの学会において下さって報告をいただきました。まとめにはほど遠いものとなってしまいましたが、心より感謝いたします。ありがとうございました。

●セッション2

サッカーの社会学

—2002ワールドカップサッカーを考える—

山下高行（立命館大学）

2002W杯サッカーをどのように捉えるか。このことはすでに開催1年前となった現在大至急で議論されなければならない問題である。このセッションはまさにそのために、こんな見方も、あんな見方もできるのでは、ということをフロア参加者も一緒になって議論してしまおうということで設定されたものであった。

各ゲストコメンテーターはこれに応え、前田博子氏は経済的側面から、とりわけチケットに焦点をあわせ日本の準備状況について、アン・ミンスク氏は韓国社会のヘゲモニー統合との関連でW杯が持つ意味を、ジョン・ホーン氏はGlobalisationのなかでメガイベントとしてのW杯が持つ意味について、それぞれの切り口でW杯の位置と研究課題を語った。またコメンテーターのリム・ヒョンジン氏は、それぞれの議論を受けW杯研究の対象と方法を、1.ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバルという4つの変数、2.これらに対応した水準でのトピックの分析（政治、経済、メディア、文化意識等）、及び社会文化的変数の交差点に研究課題とその水準が存在すると整理し、また2002W杯の特徴が日韓共催にあることから、日韓それぞれのW杯の主導的エージェントによる性格の相違、日韓問題（教科書問題も含め）、グローバル経済のなかでの日韓経済に与える意味、FIFAの位置、コンテキストとして地域住民の生活文化等々、比較研究の課題・方向について述べられた。またジョン・ホンイク氏は現代スポーツが市民社会にもつ意味について、その

現状を見る必要があるとし、広範囲な意味を持つ現代スポーツが商業化のなかで意味喪失に陥っていること。これはフォイエルバッハが宗教について語った状況と酷似しているとのべ、W杯はとりわけ青少年に対してその意味を回復する契機として考えるべきとし、いくつかそのための課題を指摘された。

このような報告に対し、フロアからは、W杯を主導するのは韓国=政府、日本=民間という図式は必ずしも成り立たず、フェーズによって異なる点、また地方債等の財の流れをどのように考えるかが重要であること、またこれと関わりFIFAの位置やそれと結びついているISLの動向、及びこのリンクによるW杯の性格の変化をどのように捉えるか。このことがグローバル化の中で重要な意味をもつ点、等々議論が交わされた。ここで全て報告できないが、フロア、報告者、コメンテーターそれぞれかなり面白い論点を提示していたので、時間がないことが極めて残念であった。

テーマセッションに参加して

高橋義雄（名古屋大学）

テーマセッション2は、3名のパネリスト、2名のコメンテーターの総勢5名（ほか司会2名）で進められた。人数の割に時間が少なかったことが残念であったが、司会者やフロアからの質問があり、ワールドカップの社会的な事象としての大きさを実感することができた。

今回のセッションでは、日韓共同開催の2002年ワールドカップが社会学者にさまざまな研究の切り口や研究方法を提供することが確認された。たとえば個人の行為の変化という個のレベルから、開催地や組織内でのローカルな側面、国家と国民の関係に見られるナショナルな側面、また日本と韓国に生活する人々や東アジアへの影響を考えればリージョナルな側面が表出てくる。もちろんグローバルな視点の動きも見逃せない。

人はイメージされる社会的な文脈によって「行為」し生活している。こうした現実に生きる人間にとって2002年ワールドカップは、既存の社会的な文脈を強化することもあれば、動搖をあたえることもあるだろう。いずれにせよ、孤立した生活をしていない限り少なくからず影響を与えるだけのエネルギーをもったイベントである。研究者ですらしり込みするほどの妖怪（ワールドカップ）を研究していくためには、おそらく複数の研究者がさまざまなレベルでディスカッションし、そして原稿にすることで世に問う場が必要になるだろう。

昨今の情報化によって、大量かつ雑多な情報にとりかこまれて生活している人間は、ますます複雑性の縮減のための戦略的な適応能力が求められる。しかしいっぽうではそれが

権力構造を形成し、ヘゲモニー装置となることもある。今回セッションに参加して、2002年ワールドカップの巨大なエネルギーの影響を静的にとらえるのではなく、さまざまなレベルで刻々と変化するせめぎ合いのダイナミズムとしてそのエネルギーを描き出すことが大切であると感じられた。

●一般発表

座長：黒須 充（福島大学）

「年齢層別にみたウォーキング実施要因の検討」

高峰 修（中京大学）

高峰氏は、ここ数年、中高年を中心に広がりをみせる「ウォーキング・ブーム」を研究対象に取り上げ、年齢層別にみたウォーキング実施要因の検討を試みた。

49歳以下、50歳以上それぞれの年齢層において、ウォーキング／スポーツ実施ならびにスポーツ実施／非実施を従属変数とするロジスティック回帰分析の結果、いくつかのウォーキング実施の規定要因が明らかとなった。特に、50歳以上において、体育に対する態度、18歳以降のスポーツ経験、婚姻状況、自由時間に有意な違いが見られ、体育に対する態度が非好意的であり、過去にスポーツの参加経験を持ち、既婚であり、自由時間が長いということがウォーキング実施に関連していることが示唆された。

フロアより、学校体育の意義を否定しかねないとの危惧も出されたが、ウォーキング人口が推定3,300万人（内閣府「体力・スポーツに関する世論調査」平成12年）を超えて、中高年世代のスポーツ実施がわが国のスポーツ人口の底上げにつながっていることはまぎれもない事実であり、氏の今後の継続的な研究に期待したい。

「縦断的研究による高齢者の運動実施パターンと生活満足の分析」

石澤伸弘（神戸大学大学院）

石澤氏は、「神戸市老眼大学」受講生を対象に、高齢者の運動実施パターンとクオリティ・オブ・ライフの関連を縦断的研究（平成11年11月と平成12年7月に調査を実施）により、明らかにしたものである。

その結果、生活満足度の高い者は、運動・スポーツを継続している傾向が強く、スポ

ツ参加（独立変数）が生活の質・満足度（従属変数）に関連していることが示唆された。

今後は、スポーツ参加が、個人の生きがいや生活の満足感に具体的にどのような効果、変容をもたらしたかといった質的な側面へのアプローチを行うことによって、具体的な生涯スポーツ施策にも応用されるのではないだろうか。

座長：今村浩明（武蔵野女子大学）

競技化する身体障害者水泳

—質問紙調査の結果から—

樫田美雄（徳島大学）・岡田光弘（国際基督教大学）・阿部智恵子（徳島大学大学院）

第16回日本身体障害者水泳選手権大会における参加スイマーに対する質問紙調査を9年前の第7回大会における調査結果と比較し、身体障害者水泳の競技化が進行しているが、これはすべての選手層に等しく進行している事態ではなく、障害者水泳選手の二層分化が進行している可能性を示唆した。

障害と人生

—障害者水泳のライフコースをとおして—

阿部智恵子（徳島大学大学院）・樫田美雄（徳島大学）

障害者スポーツを考察する上で、「治療モデル」や「生活モデル」を超えた「資源としての障害モデル」を提出し、自分を納得させる物語の資源として「障害カテゴリー」が使用されることを面接法を通して明らかにした。

今回の発表では2例が紹介されたが、事例A（女性）においては「障害者」「健常者」というカテゴリーのもとに、自分の位置を健常者側に置きながらも、障害者と健常者の立場を使い分けており、事例B（男性）においては「障害者」「健常者」のカテゴリー自体を、アスリートとしての一貫性を強調することにより変化させ、障害者水泳を自己と人生に関する物語を書き換える装置として機能させていることを明らかにした。

この2題の発表は関連報告であり、一括して質疑応答を行った。

Q1 司会：「生活モデル」と区別される「資源としての障害モデル」の違いは何か。

- A 1 「生活モデル」でも説明可能だが、障害者の語るエピソードを理解するのには、「資源としての障害モデル」が有効である。
- Q 2 後藤貴浩（群馬大）：障害を身体資本と考えてよいか。
- A 2 そう考えてもよいが、障害者の社会的背景の分析をするには、エスノメソドロジーなどの理論的補強が望まれるだろう。
- Q 3 松村（筑波大学）：研究の倫理的側面について、例えば資源という言い方は、失礼ではないか。
- A 3 倫理に関する責任問題はクリアしていると考えている。
- Q 4 清水諭（筑波大学）：興味深い研究だが、健常者の世界が見えてこない。
- A 4 指摘の通り。今回は戦略的に障害者本人インタビューを中心とした。

座長：佐藤利明（岩手県立大学）

第1報告の前田会員による「環境保全と地域振興をめぐるエコツーリズムの可能性と課題」は、「エコツーリズム」を「環境保全や環境教育を志向する」自然体験型観光で地域振興の可能な観光開発と押さえた上で、北海道弟子屈町のカヌーの事例からエコツーリズムの可能性を探る事例報告であった。アウトドア体験観光業者（＝カヌー）の実態、農家の意識などの分析をふまえて、弟子屈町の課題として、エコツーリズム推進主体の欠如、低调な地域住民の共同性、「旧住民」の認識の低さという3点を指摘し、観光業者と住民の意識的な「ズレ」の解消と住民参加のしくみづくりが重要との展望を示した。

第2報告は、小谷・小椋会員の「長野五輪後における『白馬村－スキー村の定住条件と環境条件』に関する研究」で、白馬村の地域住民が住み続けることの可能性を探る実証報告であった。「砂防ダムでゲレンデが保たれている」白馬村の脱スキー村による定住条件として、ペンションオーナーのネットワークなどの地域における人的資源の活用、意識改革による「ウチ（地域内）のパイの拡大」が必要との提言が示された。

質疑応答では、①ケース・スタディにおける研究者のスタンスの問題、②展望や提言についての地元の受け止め方といった質問が出され、①については、研究の質的深まりを求める必要（小谷会員）、事例として「残す」こと（前田会員）。②には、地元との対応で提言を行いそれなりに受け止められている（小谷会員）、「エコツーリズム」についてもう少し積極的な提案を考えたい（前田会員）、といった回答がなされた。

両報告とも「開発」と「環境」というキー・ワードを軸にした実証研究として今後の成果が多いに期待される報告であった。なお、質疑応答の時間が短く、方法論的な論点が深められなかったのは残念であった。

座長：山口泰雄（神戸大学）

最近、スポーツのフィールドからユニークな現象やリアリティに関する研究報告が少なくなり、やや寂しい気持ちになっている。今回、発表があった2編はその意味で新たな研究テーマへの関心を呼び起こすものである。

岡田千あきさんは、「スポーツを通じた途上国開発—NGOハート・オブ・ゴールドの活動を例に—」と題してフィールドワークに基づく研究発表を行った。まず、スポーツに関する開発協力の国際動向を詳細にレビューした。

次に、有森裕子を代表とするスポーツNGOである“ハート・オブ・ゴールド”が開催したランニング・イベントのフィールドワークの成果を発表した。これまでの被援助国へのスポーツ開発に加えて、「スポーツによる開発（Development through Sport）」の概念が生まれているという。これは、スポーツが持つ機能や特性が、途上国開発に寄与する可能性が注目されている。今後は、スポーツ開発に関する分析枠組みとケーススタディの蓄積が期待される。

黒須充さんは、「総合型地域スポーツクラブと社会公益性に関する研究」を琴岡町と福野町における調査結果を基にして、発表した。

わが国の地域スポーツのフィールドにおいて、今、最も社会的関心が高いのが総合型地域スポーツクラブである。しかし、これまででは理想論や理念論が中心で、実証研究は少ない。

この研究では、総合型地域スポーツクラブの育成モデル事業を終了した2つの町を事例として、スポーツ活動による効果や会員と非会員の医療費の違いなどが報告された。クラブ加入者は未加入者に比較して、総医療費が低額であることが明らかになっている。

この研究における総合型地域スポーツクラブの「社会公益性」という捉え方は、これまでの「自分たちのスポーツ」（私益）という捉え方に対して、総合型の意義を裏づけることができるという点で注目される。今後は、「総合型の社会公益性」の明確な概念定義とその操作定義の提起を期待したい。

座長：平野秀秋

この会場は、主題が「身体」という問題に集中した。

第一報告として、亀山佳明会員が研究委員長を務められた成果を携え、「身体の生成論」と題する重厚な報告を披露された。その論旨の中心は一言で要約すると、1) 現象学の出現以後、社会学は当然にも「身体論」に学ぶべきであること、2) 「身体論」に学ぶべき

必要は、二元論の克服を目的とせねばなぬこと、という二点にあった。論点を整理され多くの事例提示されたこの報告は熱く会場を包み、傾聴させるものであった。上記二点は貴重な提言である。

第二報告では、瀬尾恭子会員が「踊る身体の現象学的研究」と題した事例研究を報告された。主に振り付け者と踊り手との意志疎通に関するプロセスの報告であった。

ともに身体論であり、かつ現象学に関わる報告であったにもかかわらず、司会者の不手際で会場参加者・報告者間および報告者相互間の討論時間が十分でなく、相当数の方から重要な質疑の口火が切られたにもかかわらず、これから核心、という寸前で討論を打ち切らざるをえなかつたのは、残念であると同時に、深くお詫びしたい。

その代わりにというわけではないが、会場からの発言を聞きながら司会者として感じた点を若干のべる。会場発言を参考とするが、しかし私見であることをおことわりしたい。まず、亀山会員の、二元論は自他、主客などの対立を招くという論点はよく理解できる。だが「生命と自然」の対立を招くという指摘は、より深く掘り下げていただきたかった。というのも「人間の生命」と自然を対立させることが、GMや人工授精等に見られる現代人の悪夢だからである。拙訳で恐縮だが、フォックス『生殖と世代継承』(法大出版)はこの問題を扱い、この対立がデュルケムどころではなくヨーロッパ社会の古代史に遡ると論じている。ではこうした重大な問題を再検討するに際して、ドゥルーズは論外としても、メルロ＝ポンティやベルグソン程度ですむのだろうか。それにしては「生成論」とは何だろう。あらゆる生命的の生成は受精に始まる。では産んだ嬰児を引出し隠した女子高生は死体遺棄に問われ、10個の卵を人工授精させ、よさそうな一個を体内に戻す医師は大金をものにしている現実は、生成論と何か関連があるのだろうか。こうしたことが大いに気にかかった。今後の展開を待ちたい。

次に瀬尾会員について。踊りは、無文字社会を筆頭にあらゆる場所に見られる重要な人間行動である。その中で、振り付け者が居るものは例外的なように思われる。では踊りを現代のパフォーマンスの中に引き付けることは、そこから積極的な展開が見られるだろうか。せめて無文字社会の踊りとパフォーマンスの差違の明確化は、どうしても必要ではないだろうか。瀬尾会員は春秋に富む人材と思われる所以、どうか今後人類学をして傾聴せしめるような学風を目標としていただきたい。

以上、何だか「×××解体的再編」のようなコメントに聞こえるかもしれないが、小泉純一郎さんにかぶれたことにしてお許しいただきたい。ただし私自身はその段階にすでに達していると考えているのだが。

座長：西山哲郎（中京大学）

『スポーツ競技者のアイデンティティについて ：身体との関連から』

大隈節子（九州大学大学院）

社会学におけるアイデンティティ研究において、カルチュラル・スタディーズの流れを無視することは、昨今難しいことである。「社会化」という用語とともに議論されるこれまでのアイデンティティ論と比べると、その特徴は、「歴史的文脈を踏まえながらも、いまここで達成されるアイデンティティを、その動態において捉えること」としてまとめることができるだろう。その姿勢に私は全く共感するものであるが、しかしひとたび社会調査において、その「動態における把握」の実現を考えると、少なからぬ困難を覚えずにはいられない。

その点、今回の大隈氏の発表は、その困難に挑戦する試みの第一歩として評価できると私は考えている。もちろん本人は、「流行りもの」に依拠するような姿勢は見せなかつたし、手堅い方向性をめざしていることも明らかであった。その点でも今後の発展に期待したい。

『全国高等学校野球選手権大会出場校の研究 ：学歴社会の視点から』

重村敦司（東海大学大学院）

私はかつてある学会で、報告者の割り振りの下準備をしていたが、「噛み合う」組み合わせを見つけることは難しく、毎回苦慮したものだった。今回のふたつの発表は、一見すると大きなズレがあり、かつての私なら一緒にしようとは考えなかつただろう。しかし座長としてまとめなければならない立場になってみると、そこには意外な可能性が開かれていた。高校球児が甲子園をめざすなかで身体能力を文化資本に転換させ、学歴社会に自分の居場所を開拓していく様を考えることは、まさにその歴史性を踏まえたアイデンティティの動態把握を考えることでもあった。

当日は、発表の前に私のそうした思いを会場にぶつけ、会員のみなさんに「できればふたつの発表を相補的に関連づけて質問して頂きたい」とお願いした。そうすると、突然の身勝手な依頼にも関わらず、私が期待した以上のスケールで実現してくださった。未熟な

座長の補佐をして頂いたみなさんに、ここで感謝の意を表明したい。

座長：橋本純一（信州大学）

「九州一周駅伝」が伝えてきたこと

山本教人（九州大学）

報告は九州を代表するビッグ・イベントのひとつである「九州一周駅伝」の新聞報道を対象に、記事がどのような事柄を、どのような方法で我々に伝えてきたのかを明らかにすることを目的にしている。この目的のため、過去に行われた九州一周駅伝の第一回大会（昭和27年）から第42回大会（平成12年）までを報じた西日本新聞の記事を紙面の構成や記事の分量、そこで取り上げられているテーマと語り口などの点が検討された。

分析の結果、「勝負」「男らしさと女らしさ」「チームワーク」「近代化」というテーマが共通して検出された。特に「勝負」には、多様な二項対立図式ともいえる「物語」が存在していた。そしてそれらは他の「物語」と容易に接合可能であり、かつ多様な読みをよびこむことが可能であるとされた。また、大会の権威づけの方策や語りの変容についても報告された。

氏の報告は、メディア・スポーツ研究の枠組みにおいては「メディア・メッセージの内容分析」に位置付けされよう。この種の分析は日本でもすでに長い歴史を有しているが、「交渉された読み」「対抗的な読み」のような読み手の能動性には敢えて汲みせず、改めてメッセージを構造・内容の次元から検討したところに特徴を見出せよう。ただ、フィスクの「新聞は多様な読みを制限する記事構成になっている」という見解に対して、事実上、反論を試みたわけであるが、この点に関しては、説得力が今一歩だったように思われる。

座長：中江桂子（成蹊大学）

この一般発表部会では大学院生の発表が続きました。高井さんは『スポーツ社会学研究』第9巻の最新号に、論文「メディアのなかのスポーツと視聴者の意味付与：高校野球を事例として」を掲載されていますが、そこで扱った同様の調査を基にした研究発表でした。高校野球中継の多様なメッセージを性別や世代の多様な視聴者がそれぞれに異なる解釈で受容するありさまの調査です。また橋本さんは、スポーツとメディアに関する研究潮流の整理の後、それぞれの問題点を探りつつ、日常生活に根ざした研究の価値を再発見しよう

という、研究そのもの的方法や枠組みを俎上にのせようとした発表でした。

お二人の発表は大変にフレッシュで、それはフロアにも伝わっていたと思います。しかし、残念な点もありました。

高井さんは、学会誌の掲載論文の内容をそのまま発表せずに、同じ調査に基づきながらも異なる角度から考察できることを発表しようとされました。いずれ読まれる論文と同じ内容を聞いてもらうことに対する、発表者としての躊躇と配慮が働いていたようです。しかし司会者として事前にレジュメや丁寧に書かれた論文の方を読んでいた私にとっては、結果的にその配慮がせっかくの研究の焦点をぼかしてしまい、中途半端な結果にしてしまったと感じました。また橋本さんは、日頃の勉強から感じられたこの分野の研究蓄積への不満をなんとか学問的な言葉として語ろうとされました。主要な概念（「日常生活」「集合的対応」「能動性／受動性」など）の吟味が充分でなく、結果として問題点や内容が、残念ながらフロアの方々には理解され難かったと感じました。

学会発表というものは、現在の発表者にとっての研究の＜到達点＞を言葉として＜伝える＞こと、それが最も大切なことではないでしょうか。それでこそ発表者と学会双方にとって実りあるものだと、私は思います。特に院生にとっては、研究の精一杯の、質の高い到達点を発表することが何よりも絶対的に優先されるべきで、その他は不必要、せいぜいこの目的を阻害しない範囲に止めるべきでしょう。また内容がたとえ良くても、それを人に理解してもらえるように語らなければ意味がありません。内容の吟味と発表練習を多少は重ね、発表に堪えうるものとの確信のもとに本番に臨むことは、発表者にとって必要な手続きではないでしょうか。このことは発表する当人ばかりではなく、周りの研究者にも一定の要請をすることかもしれません。これには異論もあるでしょうが、学会会場で発表者が聴衆とコミュニケーションできなくなると、大変に不毛で悲しい時間となりますので、どうかご配慮をお願いしたいものです。

院生の学会発表の増加が学会の研究の活性化に直結することを切に願ってやみません。

座長：西村秀樹（九州大学）

『我が国におけるぶらんこの「世俗化」 ：聖・俗・遊のパースペクティブから』

田端教恵（東海大学大学院）

田端教恵氏は、ぶらんこの「世俗化」を「聖」から「俗」・「俗」から「遊」へという歴史的変遷のなかに考察している。そういったパースペクティブは、遊戯・スポーツ文化の動態をとらえる一般的な方法であり、一つの文化の多側面を相対化し、個々を明確に浮

き上がらせるという意義をもっている。ただ、文化の現実に即してみると、「聖」「俗」「遊」といった側面は、沢田氏（滋賀大学）が指摘したように、歴史的にそれほど明確には区別されないのでなかろうか。ぶらんこが「遊」として自立したといわれる現代においても、「聖」「俗」も未分化に混合していると言えるのではなかろうか。例えば、ぶらんこで「振り」を大きくできるようになるとこと、立ってこげるようになるとこと、振りとびができるようになるとことなどは、子供仲間での儀礼的要素を持ちはしないか。また、子供にとって遊びは、ピアジェやミードをひくまでもなく発育発達上有効なものであるとされてきたし、フレーベルが創始した幼稚園は「遊び」を重視した「教育」を目指したものであった。こういった未分化な融合の状態をとらえる視点が加われば、重厚な研究となろう。

『自由民権期における警察武術について ：民権結社の活動と警察武術』

湯浅 晃（天理大学）

湯浅晃氏は、武道の成立を、警察武術の促進による国家の暴力の独占と、宫廷武術における暴力性の廃除と自己教育的・道徳的な価値の組み込みといった「伝統の発明」、この二つの過程の並列的な進行に求めている。これら二つの過程は、豊富な資料に基づいて緻密に分析されており、それぞれ貴重な研究の骨子をなすものとして評価される。ただ、宫廷武術から武道への結びつきは明確なのだが、警察武術による暴力の独占が武道の成立へと結びつくべきさつについて、より詳細な説明が望まれるのではなかろうか。すなわち、暴力の「独占」が暴力の自律的な「排除」へとどう進展していくかということである。図1（抄録）を見ると、そこには大日本武徳会が媒介的役割を果たしていることが推測される。

また、会場からは、国家による「暴力」の独占をエリヤスの「文明化」の脈絡からではなく、日本の脈絡のなかからみていいかという意見、「暴力」「暴力性」についての定義が必要なのではという意見等があった。

座長：菊 幸一（奈良女子大学）

身体の近代化と公園

—公園の運動場化を手がかりに—

小坂美保（岡山大学大学院）

国家権力によって人々の身体が規律・訓練化されていくプロセスを、まさに「規律・訓練」としてとらえていく直接的な対象が、これまで、そのような組織的な場としての学校あるいは学校体育におかれるのは当然のことと考えられよう。それが吉見によって運動会という場にフィールドを広げたことで、さらにそのせめぎあいがヘゲモニックにとらえられる可能性を広げ、この視点からの研究のおもしろさと対象の広がりを示唆する結果となった。小坂報告では、そのフィールドを明治期以降の公園が運動場化していくプロセスに求め、具体的には日比谷公園に体操器具・遊具が設置された意味を、広く一般の人々に受け入れられる「身体の近代化」の一例として明らかにしようとした。

しかし、フロアーからは、公園の運動場化を単にハードの設定のみで言い切ってよいのか、またそれは当時の公園に一般化できるのか、あるいは吉見が指摘したようなヘゲモニー状況に対応させて公園に集う人々の身体と公園を運動場化しようとする権力主体との間にもそのような重層性をとらえることが可能なのか、といった質問が出された。確かに、発表の趣旨からは、学校と都市との出会いの中で公園の運動場化の意味を考察しようとしているものの、近代における都市と身体との関係、すなわち教育からこぼれ落ちる大多数の余白としての都市住民の身体と公園のかかわり合い、あるいは一見自由性を保障する都市空間と囲い込まれた公園空間という場における規律・訓練の意味と可能性が、具体的な資料に基づいて論じられているとは言いたい。今後の課題として、「身体の近代化」とは何かを再度考究すると共に、微視的な権力論から公園の運動場化の広がりを都市における身体と国民国家形成のつながりへと拡大していく論理を見出していくことがあげられよう。

卓越化のネットワークとしての大学運動部に関する研究

—東京帝国大学ボート部の歴史社会学的研究から—

石坂友司（筑波大学大学院）

石坂報告は、わが国の近代スポーツ成立に関する歴史社会学をこれまでの制度論から脱却して、担い手のスポーツ実践において正統化される文化資本としての身体がいかに蓄積

され、再生産されるのかに焦点を当てて構想しようとする。報告内容は、未だに問題提起の域を出でていないが、新たな視角から運動部の歴史社会学を展開しようとしているだけに、先行研究を比較的丁寧に検討している。また、最近の教育社会学の成果、すなわち経済的に没落した士族層の身分の隠蔽装置として学校が果たした身分－階級の再生産機能（但し、「階級」にまで適用できるかどうかは検討の必要あり）に着目して、これを運動部における卓越化のネットワークという近代スポーツ組織の原型に連続的に援用しようとする考え方には興味深い。

しかし、本報告のキーワードとも言える「正統な文化資本あるいは身体資本」が、単に「卓越」という序列的優越感から資本としていかに蓄積されていくのかは、まさに身体化されたレベルでの議論の可能性として、未だにその余地を残しているように思われる。その課題が、くしくも結論部にある文化的再生産論の再考をめざす中での、教養主義との葛藤や周辺的存在へのまなざしへと向けられることになったと思われる。だが、戦後のわが国の近・現代スポーツの主流をなすものは、やはり明治期と同様に、敗戦という負の遺産をしたたかにくぐり抜けて君臨するスポーツ「界」における卓越のネットワークではないのか。そのような視点から考えると、本報告がもつ現実的、及び現代的な課題が、わが国における近代スポーツの歴史社会学に通底する課題として見えてくるように思われる。ぜひ、現代スポーツをめぐるさまざま諸問題と関連させながら、本報告の可能性を広げていってもらいたい。

座長：濱口義信（同志社女子大学）

このセッションでは合田尚樹（岡山大学大学院）「運動遊びにおける『群れ』と『集団』に関する一考察」と白石義郎（久留米大学）「カレッジ・スポーツ興隆期におけるハーバード大学のスポーツ戦略：オックスフォード対抗戦からフットボール危機まで」との2つの発表が行われた。

まず、合田の発表の要点は以下の通りであった。現在の子供の遊びを巡る状況の大きな変化の中で、「群れ遊び」の喪失と子供の孤立化状況が深刻な問題となっており、小学校を中心とする教育の場においても、スポーツを含む運動遊びを中心とした集団による遊びを奨励していくという傾向が広がりつつある。これまで、子供の運動遊び集団の研究は、一定の目標に向かって運動をする集まりといった他の社会領域に見られる一般的な「集団」概念をあてはめて行われることが多かった。「群れから集団へ」という流れを念頭に置いた研究においても、集団形成に重点が置かれてきたと言える。しかしながら、運動遊びにおける子供の集まりは、共同目標、協働意欲、コミュニケーションとしての相互作用といった社会学的集団の要件が満たされておらず、合理的に目的を達成する手段としての

集団と言うよりは、むしろ「直接的接触」、「存在の一時性」、「行動性」をその特徴とする「群れ」と呼ばれるべきものであろう。集団への発展に強調をおく観点は、「群れ」の性質の中に含まれている遊び本来の豊かさを失わせ、大人の介入による『管理された遊び』につながるモーメントもあることをふまえれば、子供の運動遊び集団を「群れ」という概念で捕らえて研究を進めていくことは、非常に重要で大きな可能性を持ったものであると考えられる。

また、白石はマックス・ウェーバーの(1)思念の転轍機機能(2)選択的整合性(3)扱い手分析の3つの方法概念を用いて、アメリカの今日のスポーツ・シーンを作り出したハーバード大学のスポーツ戦略の構造と機能を分析した。ハーバードにおいては、学生が世俗的な中心的価値観である「男らしさ」の表出の場としてスポーツを戦略化する準備をし、プロ・コーチが自らの生存の正当化のために体系的な行動（戦略）を組み立てていった。そしてアカデミックに志向する教授団との確執の中で、プロ・コーチ集団であるスポーツ局と、寄付に依存する私学経営に大きな影響力を持つ同窓会とが結合してスポーツ戦略を創り出し、それを担ったのであった。そのようにしてアメリカの大学スポーツは、イギリス渡りのアマチュアリズムを換骨奪胎してプロ化し、今日も続くアカデミックな教授団との確執を生み出した。今日ハーバード大学はカレッジ・スポーツの主要な扱い手ではないが、今日のスポーツ戦略の原型を作ったのがハーバードであった。

両者の発表の後質疑応答がなされたが、合田の発表に対しては家庭をはじめとするよりベーシックな集団との関係や、群れから集団への発展に対する位置づけなどについて質問や意見が出され、白石の発表に対しては方法論的概念や資料的な質問などがなされた。ここで発表された研究はそれぞれ領域は異なっているが、共にこれまでにない新しい視点を提供しようとするものであり、これから研究の展開が期待される。

日本スポーツ社会学会総会報告

日 時：2001（平成13）年3月27日

場 所：筑波大学

進 行：森川理事長

1 会長挨拶（井上会長）

2 議長選出：北村薰（順天堂大学）

3 議事（前記委員会報告及び理事長報告をご参照ください。）

(1) 報告事項

①理事長報告（会長の推薦、理事選挙結果など）

②編集委員会報告（学会誌の刊行など）

③研究委員会報告（学会大会時のシンポジウムなど）

④事務局報告（会員の動向など）

⑤その他

(2) 審議事項

①2000（平成12）年度事業及び決算について（監査報告を含む、別紙資料参照）
理事会での原案通り、承認。

②2001（平成13）年度予算及び事業計画（別紙資料参照）

③2001（平成13）年度 第11回学会大会の開催地は九州・福岡地区、時期は2002
(平成14) 年3月28～29日。

平成12年度予算書

収入の部：2,268,580円

支出の部：2,268,580円

差引残高： 0円

1 収入の部

項目	金額(円)	備考
繰越金	618,580	前年度繰越金
会費	1,500,000	正・学生・購読会員費
その他	150,000	広告費、機関誌売上げ費
合計	2,268,580	

2 支出の部

項目	金額(円)	備考
機関誌関係	700,000	印刷費、編集費
会報関係	150,000	印刷費（No.26～28）
通信事務費	280,000	会報・機関誌等郵送費、事務郵送費
理事会経費	300,000	交通費補助、研究プロジェクト経費
事務局作業費	200,000	作業補助（事務・会報等）、文具等
学会大会補助	100,000	第10回大会事務局への補助
その他	15,000	振り込み手数料等
予備費	523,580	慶弔費等
合計	2,268,580	

平成12年度決算書（3月15日決算）

収入の部：2,365,062円

支出の部：1,746,299円

差引残高： 618,763円

平成13年度予算書

収入の部：2,268,763円

支出の部：2,268,763円

差引残高： 0円

1 収入の部

項目	金額 (円)	備考
繰越金	618,580	前年度繰越金
会費	1,567,000	3/15現在会員370人中12年会費未納71人
機関誌売上げ	98,960	
広告費	80,000	協賛会員会費(3万円(2社)と2万円)
雑収入	522	利息など
合計	2,365,062	

3 支出の部

項目	金額 (円)	備考
機関誌関係	700,000	印刷費、編集費
会報関係	154,770	印刷代(No.26-28)
通信事務費	307,020	会報26-28と機関誌等郵送費
理事会経費	273,618	交通費補助、研究プロジェクト経費等
事務局作業費	197,911	作業補助、文具等
学会大会補助	100,000	第10回大会事務局への補助
その他	12,980	振り込み手数料
予備費	0	
合計	1,746,299	

1 収入の部

項目	金額 (円)	備考
繰越金	618,763	前年度繰越金
会費	1,500,000	正・学生・購読会員費
その他	150,000	広告費、機関誌売上げ費
合計	2,268,763	

2 支出の部

項目	金額 (円)	備考
機関誌関係	700,000	印刷費、編集費
会報関係	150,000	印刷費(No.29-31)
通信事務費	280,000	会報・機関誌等郵送費、事務郵送費
理事会経費	300,000	交通費補助、研究プロジェクト経費
事務局作業費	200,000	作業補助(事務・会報等)、文具等
学会大会補助	100,000	第11回大会事務局への補助
その他	15,000	振り込み手数料等
予備費	523,763	慶弔費等
合計	2,268,763	

上記の決算書を監査した結果、適正に処理されております。

平成13年3月16日

西垣 実彦
中島 豊雄

第V期 第5回理事会報告

日 時：2001年3月27日（筑波大学）
出 席：井上（会長）、森川（理事長）
編集委員会：佐伯（委員長）、荒井、松村、野川、清水
研究委員会：亀山（委員長）、江刺、池井、
国際交流：山口（委員長）、トンプソン、野川
ホームページ委員会：杉本（委員長）、トンプソン
事 務 局：小椋（事務局長）、小谷、松田（会報幹事）、野崎・依田（庶務幹事）
会計監査：西垣
次期学会大会：山本（事務局）

報告事項

- 1 第VI期理事選挙結果報告：選挙管理委員会より、第VI期理事選挙結果が報告された。
- 2 各種委員会報告（各委員長）
編集委員会：「スポーツ社会学研究第9巻」の発刊の経緯、決算等について報告された。
研究委員会：学会大会におけるシンポジウム等について報告された。
国際交流委員会：特に2001年7月、ソウル行われる第1回国際スポーツ社会学会に
関して、韓国側事務局から参加要請がきている等の報告がなされた。
- 3 事務局（事務局長）
 - ・現在の正会員数は370人で、昨年より21人の増加。
 - ・海外の出版社2社から会員の住所ラベルの使用（広告パンフの郵送に使用）の申
し込みがあり、有料で許可を出している。
 - ・会報26号～28号までを刊行した。その他は略。

審議事項

- 1 総会関係
 - ①次期会長の推薦：平野秀秋会員を次期会長に推薦することとした。
 - ②次期理事の承認：選挙結果に基づき、以下の15名（会長推薦を含む）を次期の理
事として承認した。

（五十音順）

荒井貞光、池井 望、伊藤公雄、川西正志、菊 幸一、黒田 勇、清水 諭、
杉本厚夫、中島信博、野川春夫、平井 肇、平野秀秋、松田恵示、松村和則、
山下高行、
③2000（平成12）年度事業・決算について報告された。決算については会計監査の

西垣会員より、監査結果が出され、これを承認した。

④2001（平成13）年度事業計画・予算案：予算案の支出の内訳に基づき、事業計画
が報告され、予算の内容を含めて承認された。

⑤総会議長候補者を北村会員にお願いすることとした。

2 第11回学会大会について：候補として九州・福岡地区でお願いすることとした。

次回開催校あいさつ

博多でみんな待つよ！

山本教人（九州大学）

日本スポーツ社会学会第10回記念大会は、盛会の内に終了しました。筑波大学、及び近
郊の大学の関係者の方々にお礼を申し上げたいと思います。

さて、学会の次の10年へ向けてのスタートは、「海に開かれたアジアの交流拠点都市」
福岡から切ることとなりました。2002年3月28日、29日がその日です。福岡市中央区の九
州大学六本松キャンパスが会場となります。

3月末の福岡は、キャンパスに桜が咲き乱れ、福岡ダイエーホークスがリーグ4連覇に
向けて開幕ダッシュをかけていることでしょう。プロ野球ファンのあなた、一緒に福岡ド
ームでホークスの応援をしてみませんか。学会の「夜の部」で力を発揮される方、西日本
一の繁華街、中洲がお待ちしております。博多ラーメン大好きという方には、名物の屋台
をご案内しましょう。早朝のジョギングを楽しみたい方、大濠公園でご一緒しましょう。
そして、そのようなことには一切興味のない研究一筋のあなたとは、太宰府天満宮にお参
りに出かけましょう。

それぞれの分野に専門家を配してお待ちしております。ぜひお越し下さい。みんなで待
つよ！

●新刊紹介

松田恵示著

「交叉する身体と遊び」

(世界思想社) 定価2200円

身体と遊びというものが、いつも正負両面から過剰な意味を背負わされるということに、少なからず私には苛立ちがあった。そういう大上段の構えからではなく、社会の中である種のリアリティを覚えたものを、徹底して言葉にするような作業が必要だと思える。もちろん、この本でそのことがなしえたなどというつもりはない。むしろその不十分さがはつきりしただけである。

(本書「あとがき」より)

というわけで、テレビゲーム、言葉、学校、マンガ、ジェンダー、高校野球、スポーツファンなどを対象として、「あいまいさ」をキーワードに一種の社会意識のポートフォリオをめざしてまとめたものがこの本です。

日々生活を送る中で、ぼく自身、確かに身体と遊びの交わる場所に、日常性の裂け目を感じたり、ある種の超越の可能性を感じることが多くあります。また、同時に思わず抑圧や不快感を感じることもあります。そういうことの意味を社会学的な言葉でうまく描いてみたい、という思いが本書の出発点でした。もとより、こうした試みが成功しているかどうかについては読者のみなさまに委ねるほかありません。多くの御意見をいただければ幸いです。

(松田恵示)

日下裕弘・丸山富雄・加納弘二著

「生涯スポーツの理論と実際豊かな スポーツライフを実現するために」

(大修館書店) 定価2300円

これまで、「ライフステージ別の生涯体育・スポーツ」に関する本格的な研究や図書は少なかったように思う。本書は、E.H.エリクソンのライフサイクル論に準拠し、それぞれのライフステージにおける人間の発達課題やアイデンティティとの関連において、遊び・スポーツ・レジャー・健康運動がどのように機能し得るのか、それを「生きる力・ゆとり・からだ・こころ」といった今日的教育課題を考慮し、よりホリスティックにまとめた、いわば生涯スポーツの人間学である。

第1章では、そのための基本的な枠組みとして、生涯(ライフ)スポーツの構図とエリ

クソンのライフサイクル論／アイデンティティ論、および21世紀におけるわが国の生涯スポーツのあり方に関する保健体育審議会の答申を総括した。第2章では子どもの遊び・遊技スポーツ、第3章では青年とスポーツ、第4章では成人と地域スポーツ、第5章では高齢者と生きがい(健康スポーツ)の諸問題に焦点をあてた。

生涯スポーツの実践者はもとより、その指導や教育のために、第2章以下のそれぞれの章を「概観」「基礎理論」「実際」に分け、その実現をめざしたつもりである。また、「補論」では、今日的な身体(からだ・こころ)などの問題の関連から、各ライフステージにおけるその中心的研究課題にチャレンジしてみた。全体を通じて、スポーツ万能主義を越え、より多元的な視点から「ライフ(命・生活・人生)スポーツ」を捉え、自然遊(び)や地域(コミュニティ)、そして受動的な癒しの側面も重要な領域として加えてある。この試みが、21世紀の生涯スポーツの理論と実践のためのひとつのメソッドになれば幸いである。

(日下裕弘)

アンドリュー・ブレイク著 橋本純一訳

『ボディ・ランゲージ～現代スポーツ文化論～』

(日本エディタースクール出版部) 定価2800円

本書はAndrew Blake, *The Body Language~The Meaning of Modern Sport~*, Lawrence & Wishart, 1996の全訳である。

著者のアンドリュー・ブレイクはイングランドの南部に位置するウインチエスターのキング・アルフレックス大学カルチュラル・スタディーズ学部の教授として、主にイギリスのポピュラー・カルチャーを対象に精力的な研究を続けている。実際、最近の氏の著書のタイトルをみるとスポーツに限らず、音楽、大衆小説などの研究にも力を注いでいる様子がうかがえる。

本書はカルチュラル・スタディーズに共通する理念といえる、「現実的で(広い意味での)政治的な目的、つまり私たちの生活をよりよい方向へ変えていくこうとする大切な目的を達成する試み」というコンテキストにおいて記されていると理解していいだろう。本書では社会的な不平等や役割分担が自然なものとみなされてゆくながれ、常に民主的であろうとするカルチュラル・スタディーズの性向が、スポーツ文化の分析を通じて表現されている。

また、アクチュアルな時代状況におけるスポーツは、先進国のみならず、今や発展途上国において人々のハートを熱くし、コア文化を形成していると考えられるが、このような状況の中で、当然のことながらカルチュラル・スタディーズが真正面から取り組んでいるネーションやオーディエンスやアイデンティティの問題も中心的な議論に据えられて

て、意欲的かつ真摯に取り組まれ、ユニークな見解を提示している。

本書はどの章も著者独特の経験や豊富な知見から、面白く読み応えのある内容になっているが、最もオリジナリティに満ち、際立った主張は1章、2章、7章にみることができよう。1章においては、スポーツを通じて、私たちの基本的思考がどのように構造化され、価値観・イデオロギーがどのように身体化し、さらには欲望、ナラティブ、アイデンティティにとっていかにスポーツ文化が重要な位置を占めているのかが、これまでにない非常にユニークな発想と視点から語られている。また、第2章ではグットマンの現代スポーツの特徴に関するあまりにも有名な理論を詳しく検証している。グットマンのあげた7つの特徴についてブレイクはかなりの部分を批判的に検討していることに注目していただきたい。大学で教鞭を執る方のゼミ等では格好のディスカッションの材料となるのではないだろうか。

バルトやバフチンからヒントを得たジュイサンス（悦楽）、至高体験という概念を援用しながら展開される議論（7章）は、十分刺激的で、スポーツ文化の重要性に説得力を持たせている。非言語的なスポーツ文化が音楽と同様の構造を保持して、社会における根源的欲望である集団的な感情のカタルシス（浄化）がいかにして成し遂げられ、また、それがいかに政治的・社会的・文化的に重要な意味を持っているのかを改めて知らしめている。特に、スポーツの美的な喜びに言及するにあたり、スポーツする身体の（曲線的あるいは直線的な）ムーブメントや空間における幾何学的要素、色彩、スタイル等の非言語的側面を強調し、さらに、スポーツの絶対的な表現と分析から、それを美的なスペクタクルとみなすことが重要である主張していることは刮目に値する。

カルチュラル・スタディーズは日常生活の構築を理解することに重点をおいているが、世界最大の文化的行事＝オリンピックが3度も開催され、日本でのサッカー・ワールド杯もまさに間近に迫り、そして何よりも、恒常に野球、サッカー、相撲、マラソン（駅伝）等が人気を博している日本社会におけるスポーツ文化の複雑さと重要性を、既存の理解の枠組みを組みかえて理解しようとする際に、本書もベーシックな著作のひとつとなるのではないだろうか。

内容

- 1章 文化におけるスポーツ、カルチュラル・スタディーズにおけるスポーツ
- 2章 歴史、モダニティ、合理性
- 3章 スポーツ化した国家——その後は？
- 4章 パフォーマーとスペクターの位置
- 5章 ボディ・ランゲージ——パフォーマーの設計
- 6章 上演と表象
- 7章 喜び、課題、可能性…

(橋本純一)

新事務局長挨拶

山下高行（立命館大学）

私がスポーツ社会学会をはじめて「見に」行ったのは、89年でしたか、上智大学で開催された準備大会からかと思います。当日は新旧の研究者とパースペクティブが入り乱れ、このときには既にカルチュラル・スタディーズの研究を行っていたのですが、少しがっかりする気分と、しかし他方で、何か新しいものが生み出されていくような熱気が立ちこめているのに驚かされたものです。それから10年を越えましたが、ここまでエネルギーな展開がおこなわれると、そのときには予想もしませんでした。

井上前会長がいみじくも、この学会は寄ってたかって何かを成し遂げる不思議な力があるということを述べられておりますが、全く同感です。私もちょうど設立後の真ん中ぐらいから運営に携わるようになりましたが、どなたかが御輿をあげると、方々から人が集まって担いでしまうところがあります。これが新しいものを生み出していく勢いなのだろうかと思ったりします。この10年を振り返ってみても、各大会や会員の著作などを見ると次から次へと新しい機軸を打ち出し、眩暈を起こしそうになるほどです。私の近くでも、ちょっと年輩の研究者の方がついていけないと漏らされたことがありました。それは皆同じだったのではないでしょうか。スポーツは80年代から急激に変容を始めてきています。それを捉えるには、これまでにない斬新な試みが多様に行われる必要があったのでしょうか。グローバル化する中、この変容の勢いはまだまだ留まりそうにありません。それに伴って私たちの多様な試みもまだまだとどまつてはならないでしょう。次はネーションという準拠枠を脱構築して行くことさえ求められているのですから。

さて今回事務局長という大任を任せられることになりました。最も苦手な領域の仕事ですが、みなさまのお力で、よってたかっての力で何とかこなしていきたいと思います。私がやらなければならないのは、縁の下でこの勢いを滞らせない、円滑な会の運営を行うことだと理解しています。既に業務を開始して驚かされるのは、存外海外からの連絡が多いことです。このような連絡を会員のみなさまに結びつけていくことも大事な責任だと思います。

さて、先ほど勢いともうしましたが、その勢いの一端は、海外研究者との研究交流がますます強まっていることです。会員の方の海外での活躍も日増しに増え、海外での著作や論文も目にすることになってきました。グローバル化する時代にふさわしい学会活動が行われようとしています。さてこの場をお借りして事務局からの情報ですが、前号の会報に小椋前事務局長からお知らせがありました、国際スポーツ社会学会ソウル大会（7.20～7.24）の件、会報が届くころでも参加の申し込みが間に合うと思いますので、ご参加希望の方は日本スポーツ社会学会ホームページのリンク先The 1st World Congress...経由でどうぞお申し込みください。現在のところ日本からは40名を越える方が参加予定です。以前

会報に書いたことがあります、まず会って、一杯飲んで国際交流が始まるというのは経験上“ほんまのこと”かと、思います。とくに韓国と私たちの学会は、2002年W杯も含め日増しに「熱い交流」が進んでおりますので、是非ご参加されんことをおすすめいたします。

さて詰まらぬことばかりで書きましてすみません。縁の下でがんばっていく所存ですので、是非みなさま宜しく叱咤勉励のほどお願い申し上げます。何かございましたら是非お気楽にご連絡 (yama@ss.ritsumei.ac.jp) のほどお願ひいたします。

旧事務局長挨拶

小椋 博 (香川大学)

井上俊会長、森川貞夫理事長のもと、庶務幹事・野崎武司さんと会報幹事・松田恵示さん兩人に助けられながら、2年間の事務局長づとめが終了しました。その他大勢の会員の協力によって何とか2年間の学会運営が無事終わり、改めてお礼を申し上げます。

この2年間で感じた事務局関係の事柄を列記してご挨拶に代えたいと思います。

- 1 1999年3月時点での会員数は294人、2年後の2001年3月では370人に達し、2年間で76人の会員増があったことになります。印象では特に若い院生・学生会員の増加が目立ったという点です。今後この方たちの研究が大いに期待されます。
- 2 インターネット上で学会のホームページが公開され、それをご覧になった多くの方々から、各種の問い合わせが事務局に届きました。そしてこのルートを通じて、新入会員も増えました。時にはメールでの対応に追われることもありました。
- 3 既に皆さんのところに届いていると思いますが、イギリスの2つの出版社から、出版物の広告宣伝のために学会員の住所録を使用したい旨の申し込みがありました。1社1回10,000円で許可を出すことになりました。
- 4 日本学術会員の登録団体となり、正式に社会学研連で会員の選挙に参加しました。
- 5 会員の住所変更や新入会員の増加が目立っていますので、そろそろ名簿改定の準備が必要かもしれません。
- 6 法政大学出版局を通じて、皆さんの大学・研究室用に学会誌を購入してください。余っていますので、お願いします。

この学会が誕生して10年、この間のスポーツ社会学研究は以前と比較して多いに多様化・高度化・深化したと私は思っています。次の10年間の更なる発展を楽しみにしています。

会員動向

住所・所属変更等

氏名	住所	Tel/Fax/E-mail	所属
麻生 征宏			

海老島 均

岡崎 勝

加納 弘二

岡田 光弘

国際基督教大学

小林 佳矢
(旧姓吉本)

鈴木 秀人

氏名	住所	Tel/Fax/E-mail	所属
----	----	----------------	----

谷口 勇一

【住所不明者】

太田 義孝 小久保信幸 横井 康博 早川みどり 若林 弘紀 岩崎 司
遠藤 竜馬 鈴木 知巳

(お心当たりのある方は事務局までご連絡ください)

【訃報】

桐田 克利会員（愛媛大学）が5月17日ご逝去されました。慎みて哀悼の意を表したく思
います。

長見 真

東京学芸大学付属小金井中学校

平井 肇

渡辺 潤

依田 充代

Trevor Bayley

Michael Ehrenreich

編集後記

この度、会報を担当することになりました。3月の理事会での決定後、4月早々に前会報担当の松田さん、前事務局の小椋さんと野崎さんから引き継ぎを受け、準備を進めてきました。かなり入れ込んで取り組んだつもりですが、結果的には6月に発行の予定が7月にずれ込んでしまいました。会員のみなさまには、ご迷惑をおかけしました。

内容的にも何か新しい試みを始めたと行ったようなことはなく、これまでのパターンを引き継ぐのが精一杯でした。これからは、ますます会員のみなさまのためになる、読んでおもしろい内容の会報を目指して努力したいと思います。皆さんも、アイデアやインフォメーションをどしどしお寄せ下さい。「突然の原稿依頼」が舞い込むかも知れませんが、その時はよろしくお願いします。

今回の作業をするにあたって、京都大学大学院の西原茂樹さんにお手伝いをお願いしました。
(HiJimmy)

日本スポーツ社会学会会報 第29号 2001年7月6日発行

日本スポーツ社会学会事務局（立命館大学・産業社会学部内）

◎学会への連絡、入退会、住所・所属変更、会費納入、その他の各種手続き

〒603-8577

京都市北区等持院北町56-1

立命館大学・産業社会学部内

日本スポーツ社会学会事務局 山下高行（理事・事務局長）

◎会報への投稿等

〒520-0862

滋賀県大津市平津2-5-1

滋賀大学・教育学部

平井 肇（理事・会報担当）

◎学会のホームページ

日本スポーツ社会学会ホームページ

<http://sport.kyokyo-u.ac.jp/jsss/jsshp.htm>

web master: 杉本厚夫（理事・HP委員長）

入会申し込み書

（※事務局へご返送願います）

ふりがな 氏名：	会員種別（どちらかを○で囲む） 正会員 · 学生会員
紹介者： (推薦人)	専門分野：
※必ず記入してください	
勤務（所属）先：	
勤務（所属）先住所： 〒	
TEL:	FAX:
自宅住所： 〒	
TEL:	FAX:
※任意です	
郵便物の発送先（どちらかを○で囲む）	
勤務（所属）先 · 自宅	
e-mail:	※任意です

井上俊

スポーツと芸術の社会学

一九〇〇円

松田恵示

交叉する身体と遊び

二二〇〇円

平井肇編

スポーツで読むアジア

一九〇〇円

杉本厚夫編

体育教育を学ぶ人のために

一三〇〇円

井上俊・亀山佳明編

スポーツ文化を学ぶ人のために

文化として、様々な形で人々と深くかかわるスポーツ。その関係を読み解く視点をわかりやすく提示し、スポーツ文化研究の基礎を築く文献読み

成にその力を注いできた——体育教育は、近代的身体とエトスの形成に多面的に接近する。アジア・スポーツ比較社会学事始めの一冊

グローバル化、ネーションとエスニシティ、都市化など、アジア・スポーツに多面的に接する。アジア・スポーツ比較社会学事始めの一冊

身体と遊びがまじりあうポップな日常を、

身体と遊びがまじりあうポップな日常を、

身体と遊びがまじりあうポップな日常を、

身体と遊びがまじりあうポップな日常を、

身体と遊びがまじりあうポップな日常を、

身体と遊びがまじりあうポップな日常を、

身体と遊びがまじりあうポップな日常を、

身体と遊びがまじりあうポップな日常を、

伊藤公雄・牟田和恵編 1800円

ジェンダーで学ぶ社会学

「生まれる」から「死ぬ」までの身近なできごとを問い合わせ、そこにひそむ「性差」の圧力を浮き彫りにする、ユニークな社会学のテクスト

2000円

井上俊編

新版 現代文化を学ぶ人のために

映画、音楽、文学、ジャーナリズム、旅行、恋愛、ファッション、スポーツなど、多様な側面から時代のドラマを照らし出す「現代文化論」

J・リーヴァー・亀山佳明・西山けい子訳 2233円

サッカー狂の社会学

ブラジルの社会とスポーツ

W杯を四度制覇したブラジル・サッカーの強さの秘密を社会学の視点から考察した貴重な一冊

2500円

日本スポーツ社会学会編

変容する現代社会とスポーツ

グローバリゼーションの潮流の中で世界の研究者が京都会議で熱く語ったスポーツの行方とは――

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56 ☎075(721)6506
<http://www.sekaishisosha.co.jp> 〈消費税別〉